



圓光大師傳

廿九世

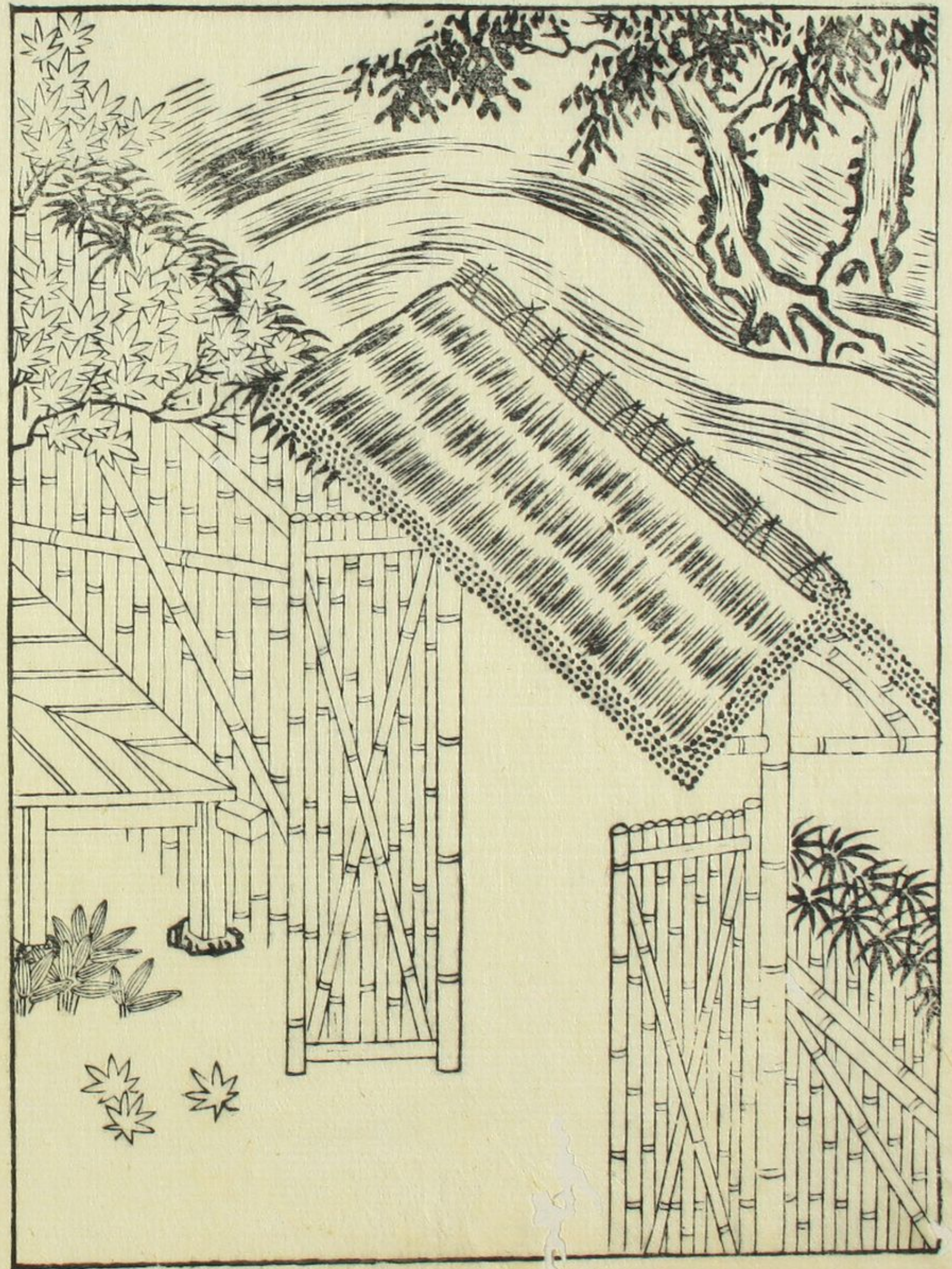
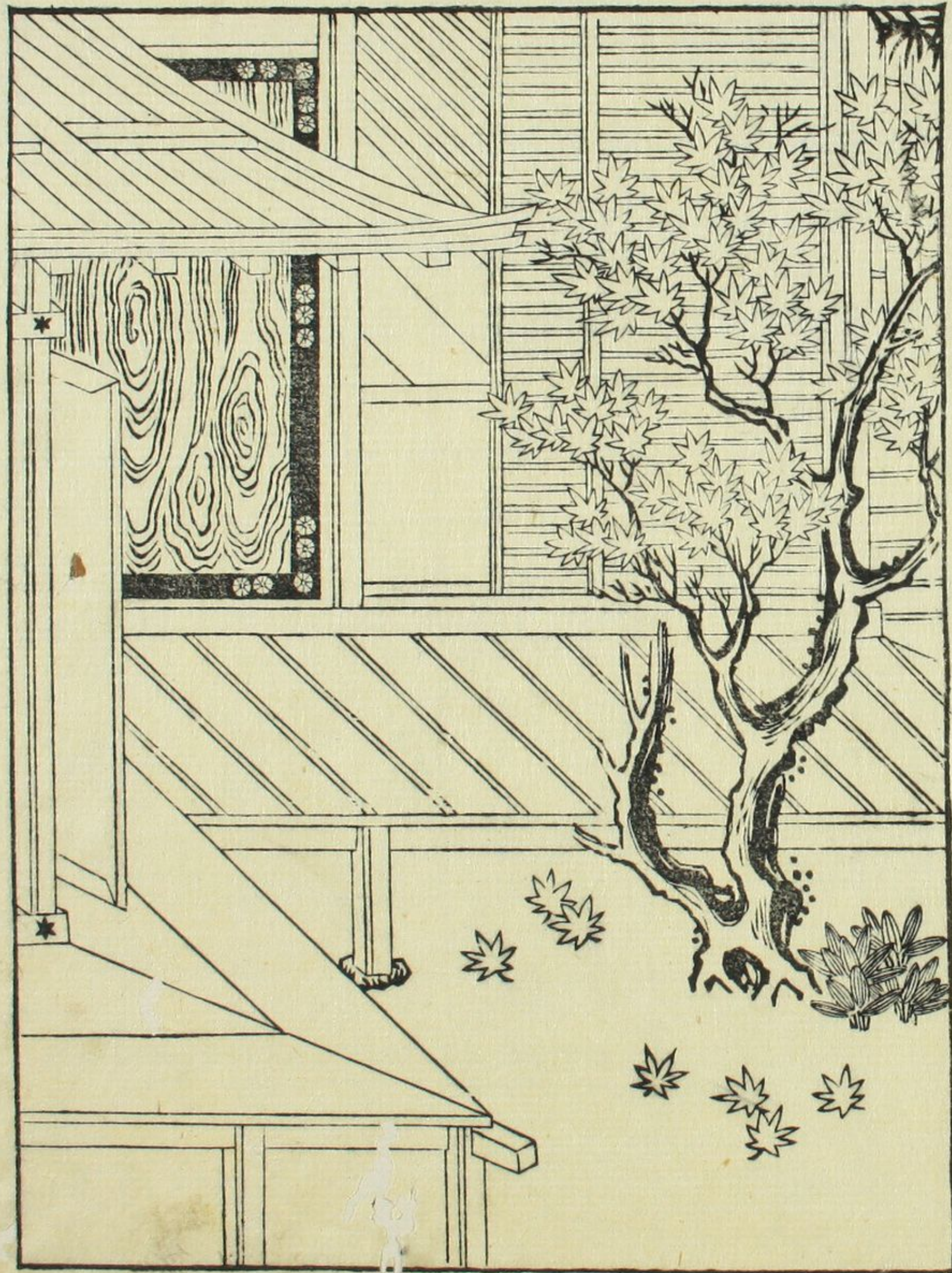


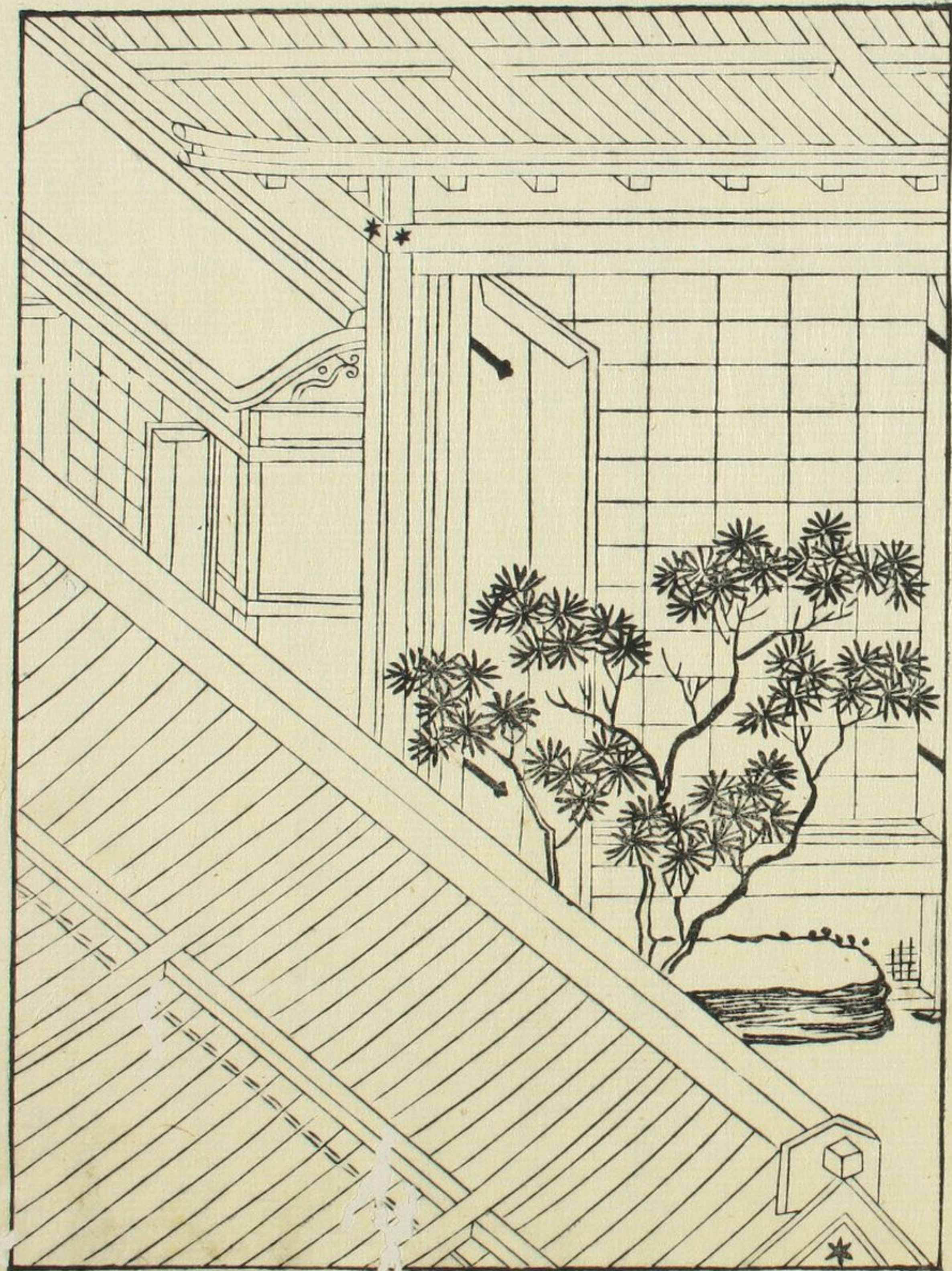
法然上人行状畫圖第二十九

比叡山ひえいさん西塔さいたの南谷なんこ。鐘下房かねげぼうに少輔しょうぼうとく。聰そう  
 敏びん乃住のすま侶りよあり。乃弟子のししに児ちこりをなをくまして。  
 眼前がんぜんの無常むじやうに驚おどろき。交衆けうしゆとのうくてほえけ  
 きい。三十六さんじゅうろく年ねん道世だうせいして。上人じゆんじん乃弟子のししに聖せいと。  
 成覚房じやうかくぼう幸西きやうさいと号なづけり。浄土じやうどに法門ほふもんをも本もと  
 たりし。天台宗たいたいしゆうより引ひきこみ。迹門しやくもんに弥陀みだ本門ほんもんの  
 弥陀みだといいぬぬ。十劫じゆしやく正覺しやうかくといいへるは。

迹門の弥陀と本門の弥陀ハ無始本覺如来  
あるゆへ。我亦所具此佛性と云く。差異  
なり。此謂をさく一念よ。たらぬ。多念乃  
數遍。これ無益なりと云く。一念義と云  
事。或自立一なるを上人此義善導和尚此  
御心よと。びた。これるへ。此は家  
より。割一。此を引。此を  
此義を興一。此を。弟子よ。此を。

撰出で。此より





兵部卿三位基親卿いしやうぶきまきちんゆくと人勸進くわんじん乃旨のみを  
信しんじて毎日五萬遍ごまんにばん此數遍すうへんをこころりたりと  
るるを成なり覺房けつぼう一念義いんげんをたてて彼卿かのきやう此數  
遍へんを難なんし一ひと重かさね問答もんたふして成なり覺房けつぼうれ  
義ぎだうひよ所存しよぜんを志しして上人じゆんじん尋もと申まをされ  
今いまの状じやう云い念佛ねんぶつの數遍すうへんだうひよ本願ほんげんを信しんす  
様さま基親きしんの愚案ぐあんくれこくにに難なん者ものいと此  
なく覺かく張ちやう此折紙ちやくし御存知ごぞんちの旨みよ御自筆ごじひつ紙しもて

書か給たまふ人々ひとびと難なん者ものに危あやむる人々ひとびとはるが  
ゆへおち別べつ解げ別べつ行ぎやうれ人々ひとびとよてよ張ちやうて耳みみよえ  
入いれぬる難なん次じ張ちやうり御弟子ごだうし等ら此說しやくし張ちやうへん不  
審しんをの張ちやうたり又念佛ねんぶつ者もの女にや犯がるる處ところへ  
ら此と申まをあひびび在家ざいけハ勿論むろんたり出家しゆたハこつ  
本願ほんげんを信しんすして出家しゆたれ人々ひとびと乃なり女にやりちらうはさ  
張ちやう條じょういと此こなく張ちやう敷しき善導ぜんどうハ目め張ちやうあけて女人  
をえん人々ひとびと此とこ張ちやうめ此この事ことあはく

信をうさへく依。基親きしんはたひしに本願を  
信して念佛を申依まのなり。料簡りょうかん之才学さいがくも依ハ  
しるゆへなり。云取註とくしゆ彼註かのしゆ進しん此状このじやう云

基親取信本願之様

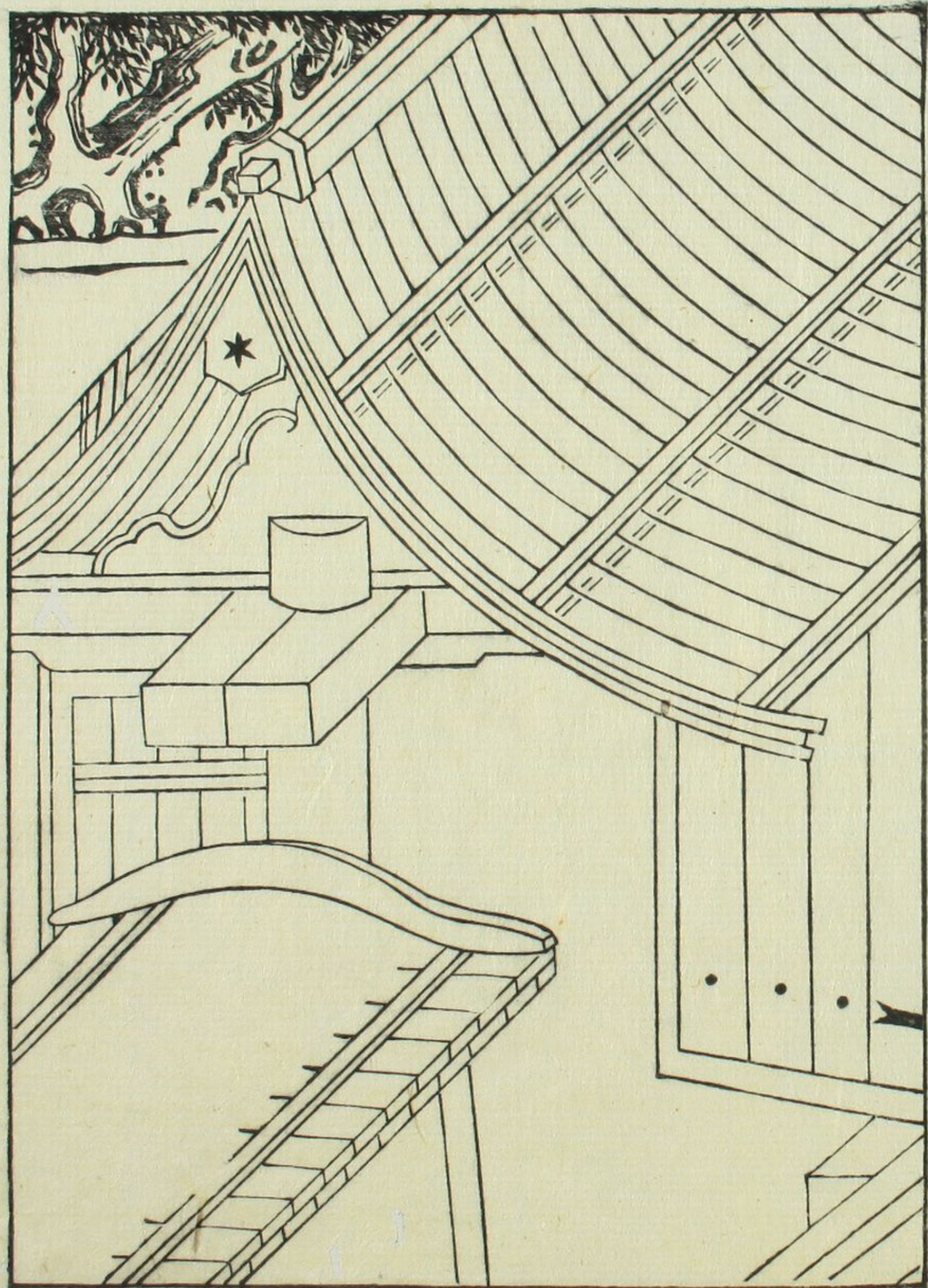
雙卷經上云。設我得佛。十方衆生。至心信樂。  
欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。文  
同下云。聞其名号。信心歡喜。乃至一念。至心廻  
向。願生彼國。即得往生。住不退轉。文往生礼

讚云。今信知弥陀本弘誓願。及稱名号。下至十  
聲一聲等。定得往生。乃至一念。無有疑心。文  
觀經疏云。一者定深信。自身現是罪惡生  
死し凡夫。曠劫已來。常沒常流轉。無有出離之緣。  
二者定深信。彼阿弥陀佛。四十八願。攝受衆  
生。無疑慮。乘彼願力。定得往生。文此等此  
文を案一依て。基親罪惡生死乃凡夫なりと  
いへども。一向り本願を信して。名号唱依。

毎日五萬遍なり。定佛に本願に乗して  
上品より往生するはさし。うつく存知れり。  
此外別の料簡なく候。あつたり或人本願を  
信する人ハ一念たり。あつれん五萬遍無益なり  
ふも本願を信せざるなりと申。基親答曰。念  
佛一聲此外百遍乃至萬遍ハ本願を信せ候と  
いぬ文候やと難者云。自力にて往生ハかたし  
か。たゞ信候なりてのちハ念佛の數無益

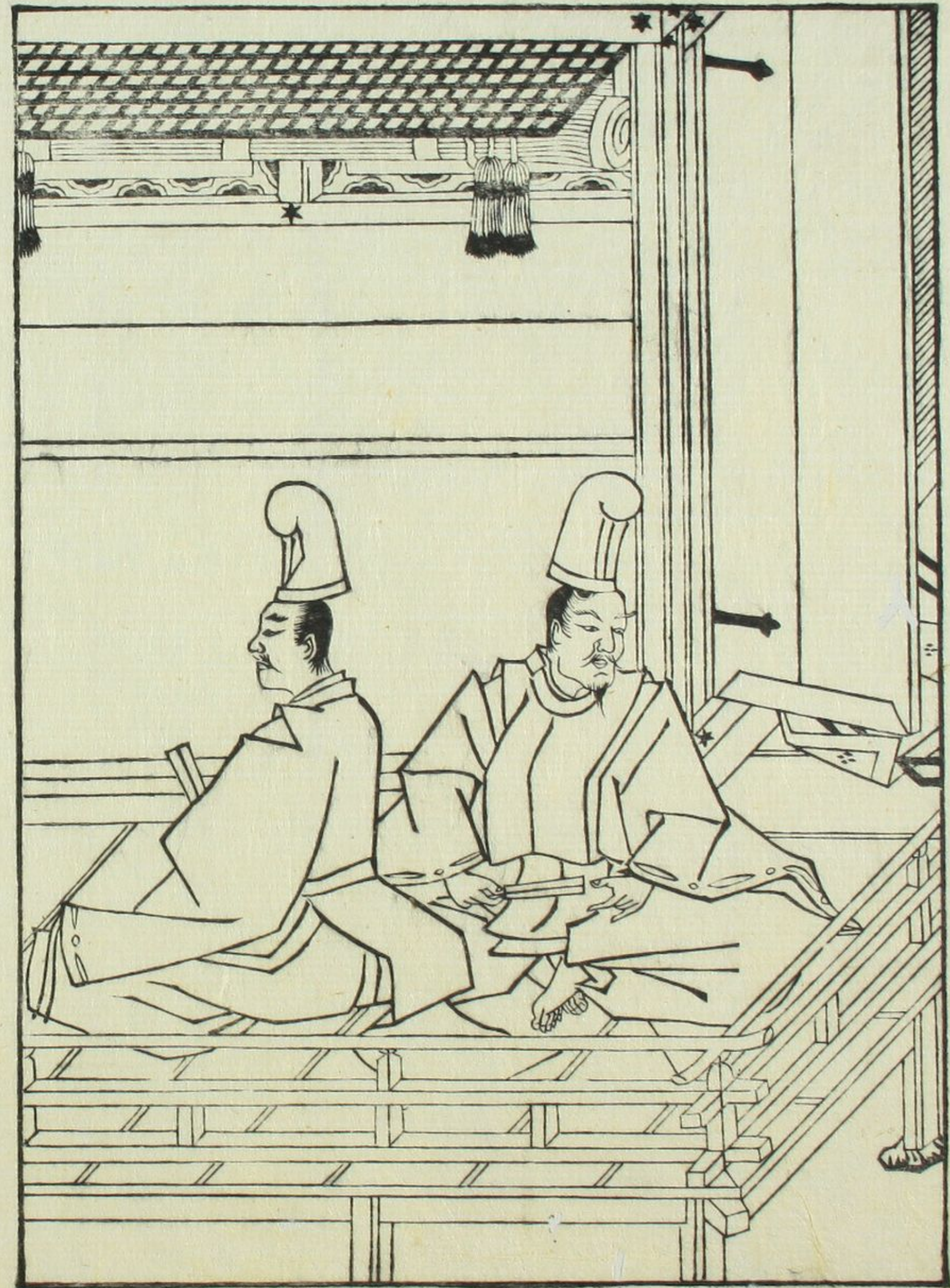
れと申。基親又申云。自力往生とし。他の雜  
行等をえて願としと申さるるは。自力とは  
申候いふ。隨て善導ぜんどうの疏云。上盡百年。下至  
一日七日。一心專念。弥陀名号。定得往生。必無疑。  
候り。ハ百年念佛すへ。とこそ候へ。又上人の  
御房七萬遍を唱へ。一欠あり。いと。基親御弟子  
乃一ふたり。よくて數多く唱へんと存候あり。  
佛の恩を報じたり。礼讚云。不相續念報彼

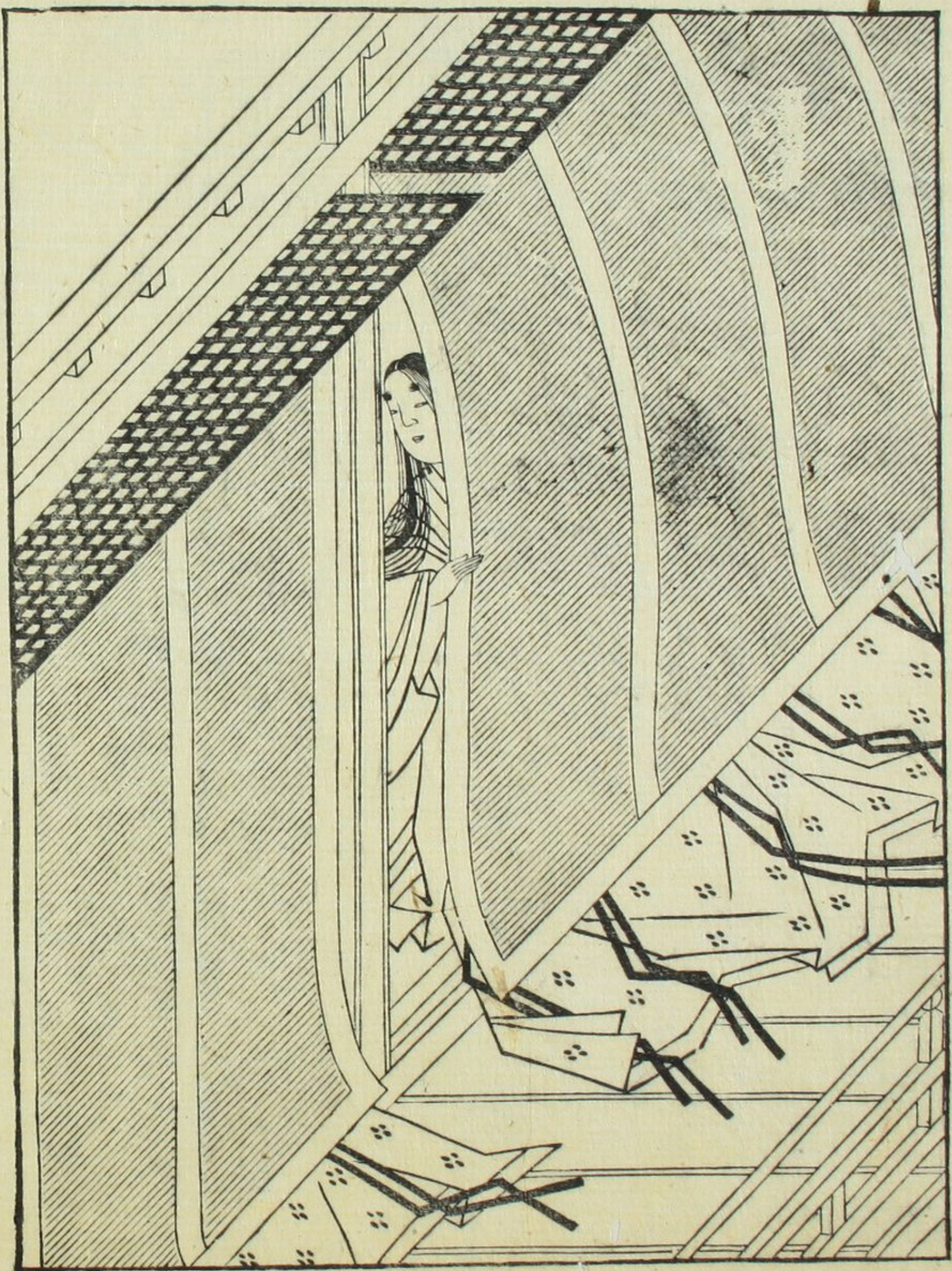




佛恩故心生輕慢。雖作業行。常與名利相應。故人我自覆。不親近。同行善知識。故樂近。雜緣。自障。他往生正行。故云佛恩を報とも。念佛數遍多くと申。西と見えたり。

申云





上人御返事云たははらひのきえていりなまうをえぬに旨謹奉儀畢。御信返ごしんかへこれ  
 一先様折紙具いちせんさまのりしづみより拜見儀らいけんぎよ。一ふも愚  
 意かの所存しよそんよ。たぐひ儀ぎめく随喜ずいき一奉儀  
 たり。近來ちんらい一念いっぺん以外の數遍すべん無益むじやくたりと申  
 儀出来儀ぎ勿論むろん不足言ふそくごん此事このことに儀。文釋ぶんしやくを離はなて  
 儀を申入まをまをいれよ。證まことを得儀え歟。如何いかん不審ふしん儀。  
 又めく本願ほんがんを信しんするも。破戒はかいをうへり。人  
 か。けり。よ。此事このこと。これ。ま。こ。い。せ。強つよよ。そ。不



可及事歟。附佛法の外道。外より求む。はたハ  
 近來念佛乃天魔さるひ来て。うぐれさの  
 狂言きやげんいてききり。水歟。たをく。左右よあ。

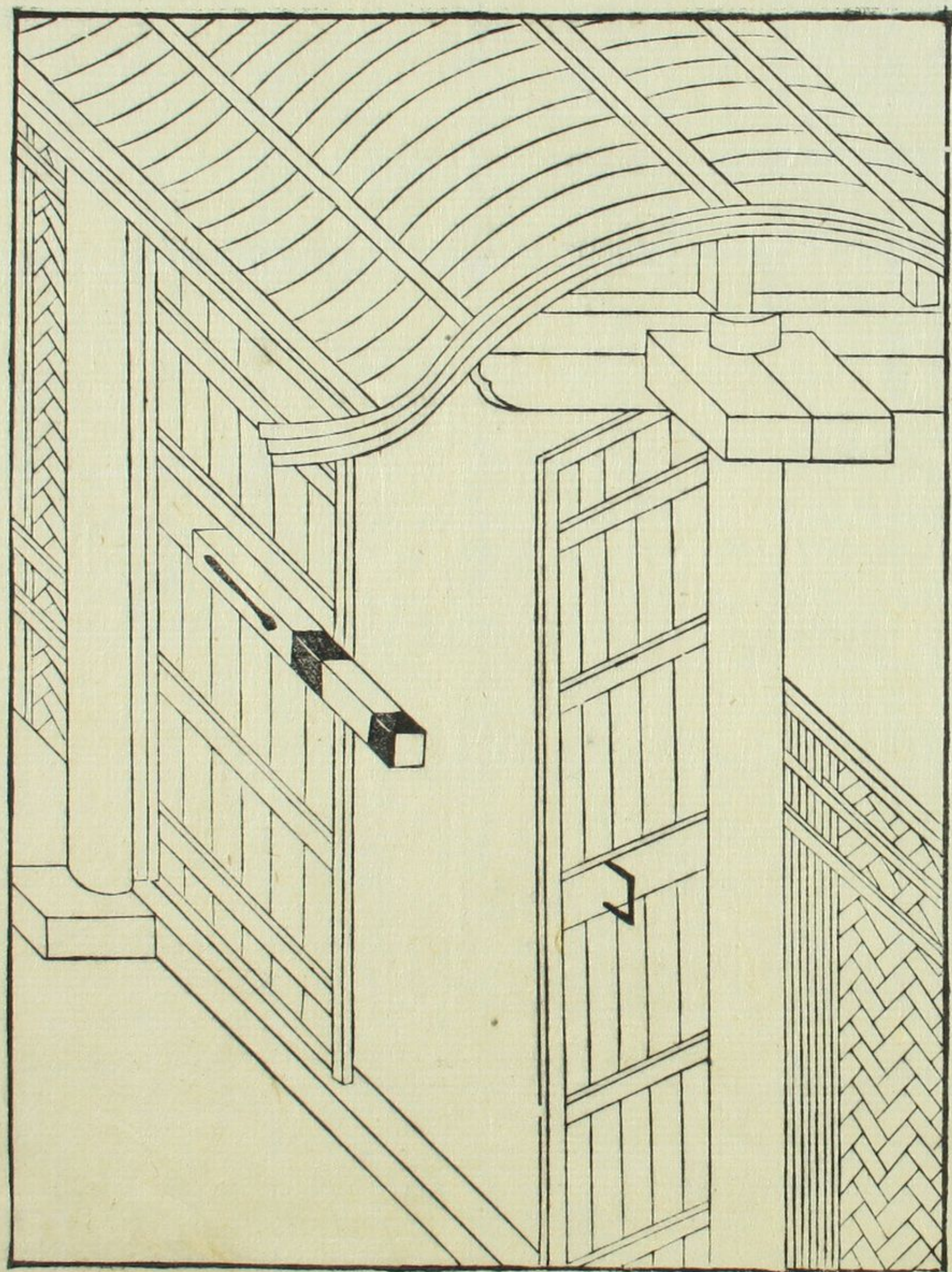
ハハ水 取註 云云

成覚房トクサキの弟子等。越後國エチゴよりして。一念義ニツゴトノチを立  
たるを。上人の弟子光明房クワミョウといふひ志ココロも。多念タニエン乃  
行者コウジャウなりきる心ココロなるぬ事コトに思オモへ。此ココ所トコロ述ツツの  
法門ホフモンを志ココロして。上人ウパウよりして。申マウいれをカこ  
御返事ミタマエ云イハ。一念往生ニツゴトノチに義京中キョウキョウより。粗流布ソリウフ  
する所トコロなり。凡言マンゴン語道ゴダウ断ツグの事コトなり。まこと  
に。御問答ミトウダウより。不可イカ及キ歟ヤ。所詮ソケン双卷經ソウケンキョウの  
下シタより。乃至オモ一念ニツゴトノチ信心シンシン歡喜クワンキといひ。又善導ゼンダウ和尚オウシヤウの

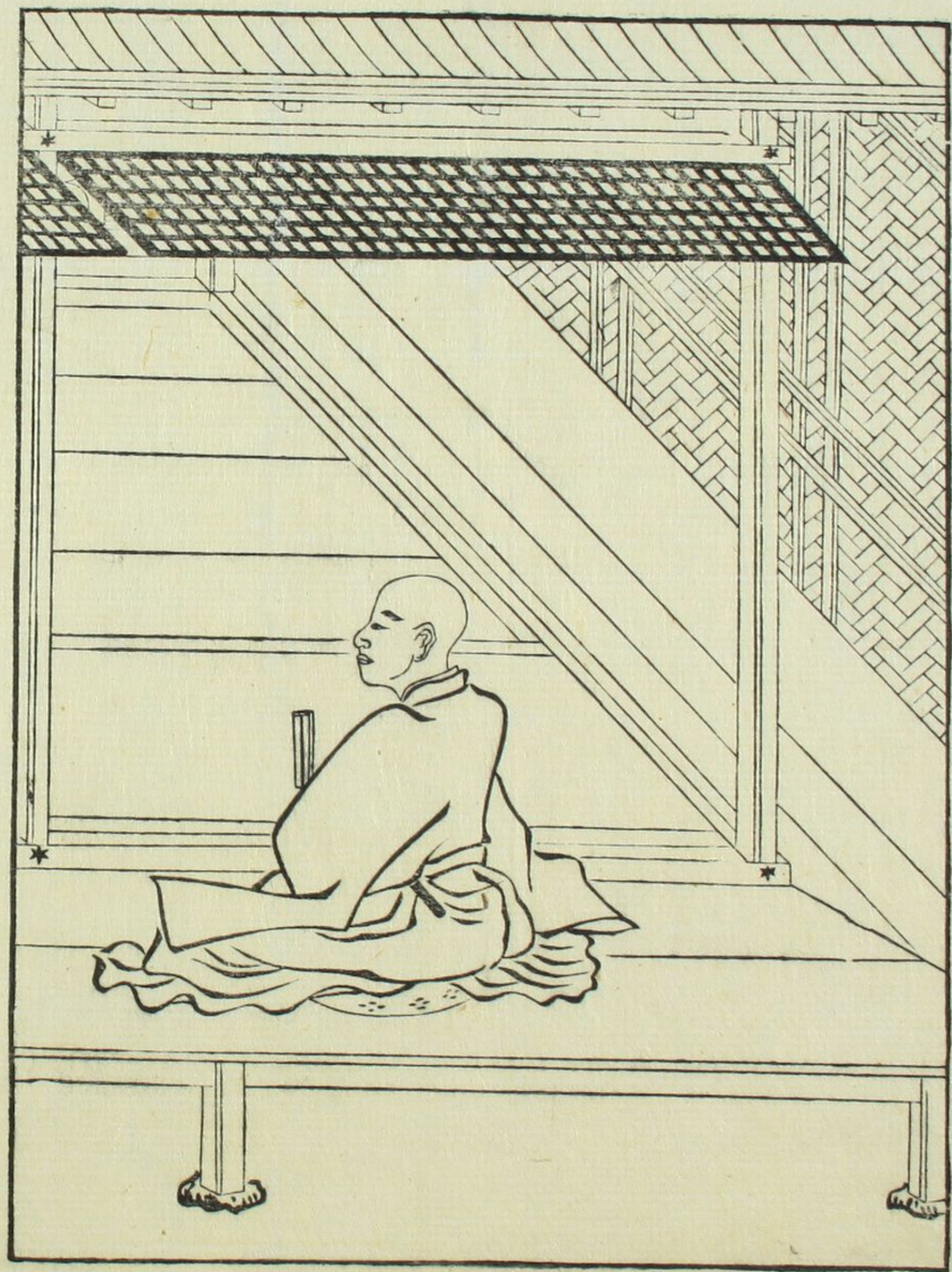
上盡一形ジョウジンイツギョウ。下至ゲシ十聲ジュウシヤウ一聲イツシヤウ等トウ。定得テイトク往生オウシヤウ。乃オモ  
至オモ一念ニツゴトノチ。無有ムウユウ疑心ギシン。といへ。此等コノトウに文モンをカめし  
料簡リョウカンする。其ソノ革カク。大邪見ダイシャケンより住スミして申マウ依イ所トコロなり。乃オモ  
至オモといひ。下至ゲシといへ。これ上盡一形ジョウジンイツギョウをカひカこコい  
ひ。乃オモ至オモ一念ニツゴトノチ。近チカ比ヒ愚癡グチ無智ムチにカ革カク。多タく  
偏ヘンに十念ジュニツゴトノチ一念ニツゴトノチなりと執シツして。上盡一形ジョウジンイツギョウを  
癡チする條ジョウ。無慚ムサン無愧ムクイに事コトに。實マコトに十念ジュニツゴトノチ一念ニツゴトノチ  
より。佛ブツの大悲ダイヒ本願ホンガンにカ引ヒキ接ツグし給たまふ。

無上く徳なりと信しして一期不退ふを行す  
處ところなり。文證ぶんじょう多おほしといふは。我われをすに  
をよらば。いふよるも。はる事ことなり。さうに。此  
邪見じあみの人。此難がたをさうゆりて。答こたていふ。わ  
い。ゆ所ところも。信しん成じやう一念いっぺんよ。こまて念ねん成じやう處ところも。我われ  
ま。り。さうて。又念ねん成じやう處ところも。す。さ。は。い。ふ。は。は。し。  
い。ふ。我われ又詞ことば尋常じんじやうなり。て。然しかり。さ。う。い。ふ。も。  
心こころの邪見じあみを。ん。か。れ。と。さ。う。ゆ。へ。の。變か定ぢやう乃

信心しんじんを。こ。ま。て。一いっ念ぺんして。の。ち。ら。へ。又念ねん成じやう處ところ也  
い。ゆ。も。十惡じゆく五逆ごぎやくなり。を障しょうを。た。る。法はう況いん  
餘あまれ小罪せうざいを。や。と。信しん成じやう處ところも。さ。う。い。ふ。此思こころ  
住ません。ま。の。い。ち。さ。う。い。お。ほ。く。念ねん成じやう處ところ也。い。ゆ。も。  
阿弥陀佛あみだぶつ也。御心ごこころよ。か。な。り。ん。也。い。ゆ。ま。れ。經論きやうろん  
入師にゅうしの。説せつも。や。ま。ま。い。ひ。と。い。ふ。懈怠けたい無道むどう心こころ不  
當たふ不善ふぜん也。ま。の。い。ち。の。慈あわれり。惡あく成じやう處ところも。さ。う。い。ふ。と  
思おもへ。申まをす。事こと也。わ。ら。九くが。れ。し。ま。り。乃



人の附佛法の外道なり。師子れたるの虫なり。  
 又うゝかづゝくい。天魔波旬のこめに精氣を  
 うゝつる輩れ。まろくの往生乃人をほ  
 やるぎんとす。歟をあやしむ。あゝ  
 ねそふへまをれたる。多事筆端よはく  
 かゝ。謹言 已上  
 取詮



卅九



光明房此状よひきて。上人。一念義停止此起  
請文を定めしむ。此状云。當世念佛門よたを  
じく行人等此中よ。多々無智誑惑の輩あり  
いよ。一宗此廢立を志し。一法入名目よ  
をよ。此心よ道心なく。身よ利養汲り。心  
よ。まよ。わつて。恣よ。妄語を。備へて諸人を  
迷亂と。偏よ。これを渡世此計と。いふま  
たく来生此罪を。わ見ゆ。いふ。いふ。と

一念の偽法を。ひら。免。無行の。と。を。謝。  
あ。無念。新義。を。た。を。一。稱。の  
小行。微善。わ。と。も。善根よ  
を。い。あ。後。け。重罪。たり。とい。へ。を  
罪障よ。を。い。い。勢。利。那。五。欲。の  
樂。を。う。け。ん。た。免。に。永。劫。三。途。此。業。を。を  
ま。人。を。教。示。て。い。く。彌。陀。の。願。を。了。此  
ひ。五。逆。を。い。ふ。心。り。ま

うせてあまはげしく袈裟を着るとして  
ゆるゆる直垂をきき入る。姪肉を断す  
魚の肉は惣は鹿鳥は食ふ。云私法大師  
異生羴羊心は釋し云。たゞ姪食をたし  
し。の羴羊は。云これ輩たる熨欲  
ふをこと。偏よる類數十住心れ中の三悪  
道の心れり。たまはる。我をあらまじやんや  
た。餘教を妨の。たあはる。た。念佛の

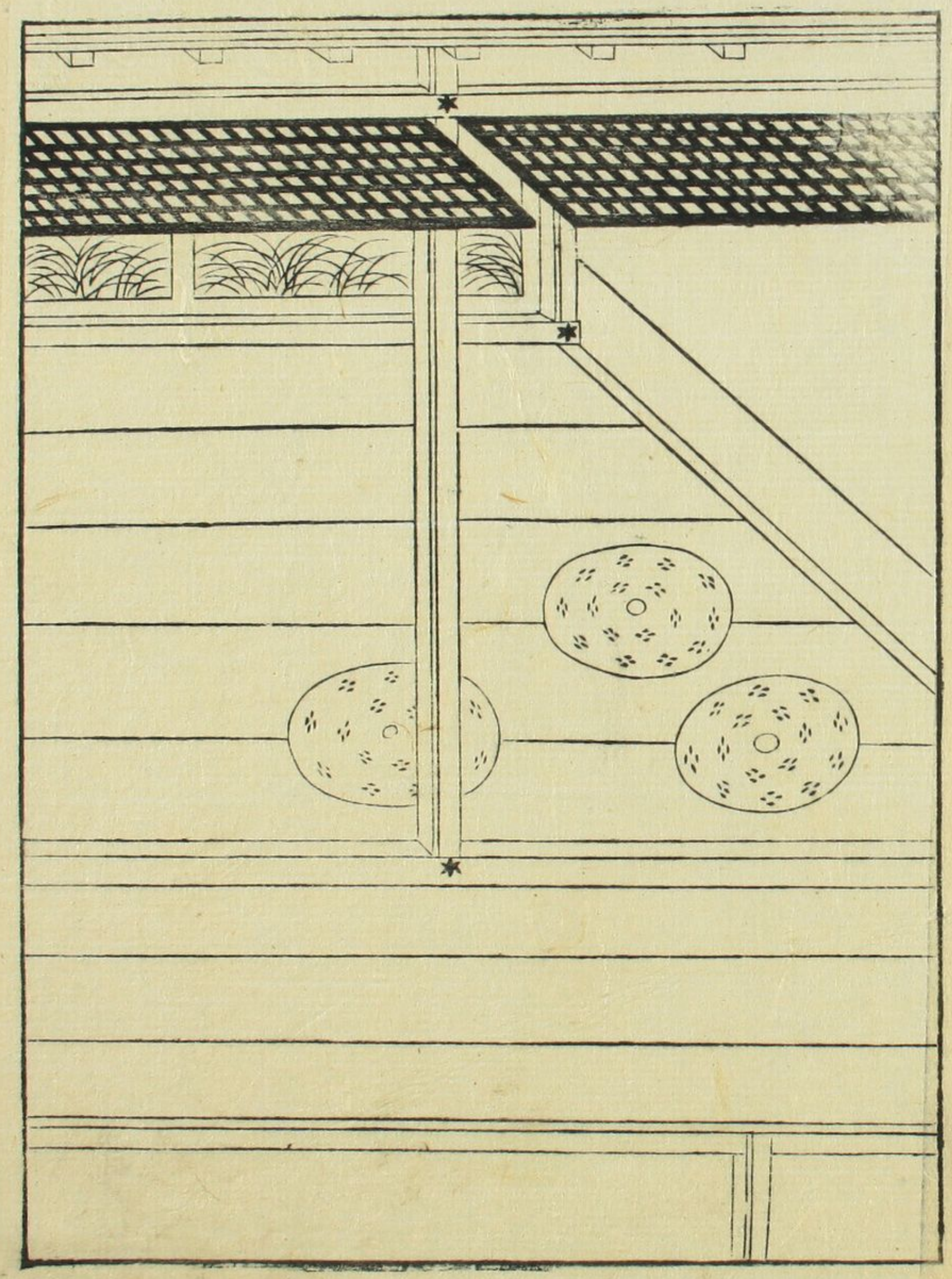
行を失ふ。懈怠無慚。業はとて。捨戒  
還俗の義を志めと。この本朝よ。外道なり。  
されとて。天魔れ。も。た。佛法を破滅し。  
世人を惑乱と。妄語をかよへて。法然  
上人の七萬遍の念佛。と。此外れ方便なり。  
内よ。實義あり。人いま。こと。は。所謂心に  
弥陀の願を志れ。身れ。極樂に往生す。  
浄土の業。こと。満足。ぬ。この。人。と。一遍

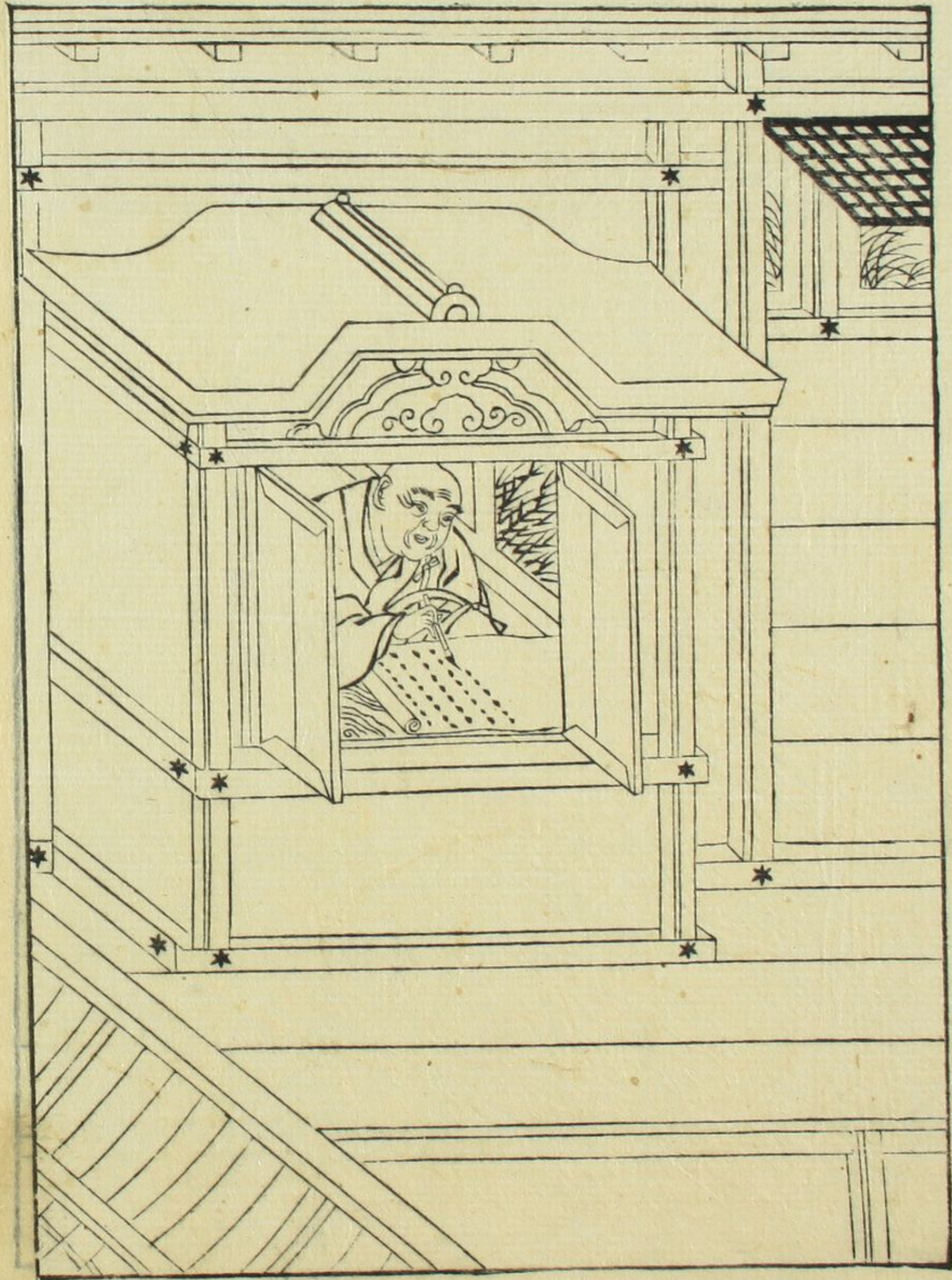
なりといゆても重て名号を唱ふる處もや。の  
上人の禪房よをいて。門人等二十人ありて  
秘義を談する所よ。淺智れ類ハ性鈍りて  
いまるはく。後利根の輩よ。いかに五人此深  
法を得たり。されその一人なり。かれ上人の已心  
中ハ真義なり。容易とれをばらづけけ。うのハ  
そのをえりて。傳授せしむ。云。凡そ  
説き。實なり。皆以虚言なり。迷者哉。而

ハまよんぐつめに。今誓言をたの。貧道り  
これを秘して。いりて。そののびひをのべ。お  
實れ。後志。さ。十方の三寶。まらに知見を  
たき。毎日七萬遍の念佛。びたり。く。それ利益。淺  
うなり。圓頓行者。れ。く。先より實相を  
縁する。六度万行を修して。無生忍。り。至る。  
い。これ法。行。た。く。く。證を。う。も。を。願ハ  
この疑網。よ。墮。び。ん。も。ぐ。ひ。邪見の稠林。を。切。て。

正直の心地をこころま。将来に鉄城をのりたぐ。  
 終焉乃金其堂よのちろへ。胡國程遠。思を鷹札と通と。北陸境遠なり。心を像教よ  
 ひくく。山川雲とさなりて。面波千万里乃  
 月よ。化導縁ありて。膝を  
 一佛土の風よら。字細端多。毛筆よ  
 あつた。

兼元三年六月十九日沙門源宣云 取詮





法然上人行状書圖第三十

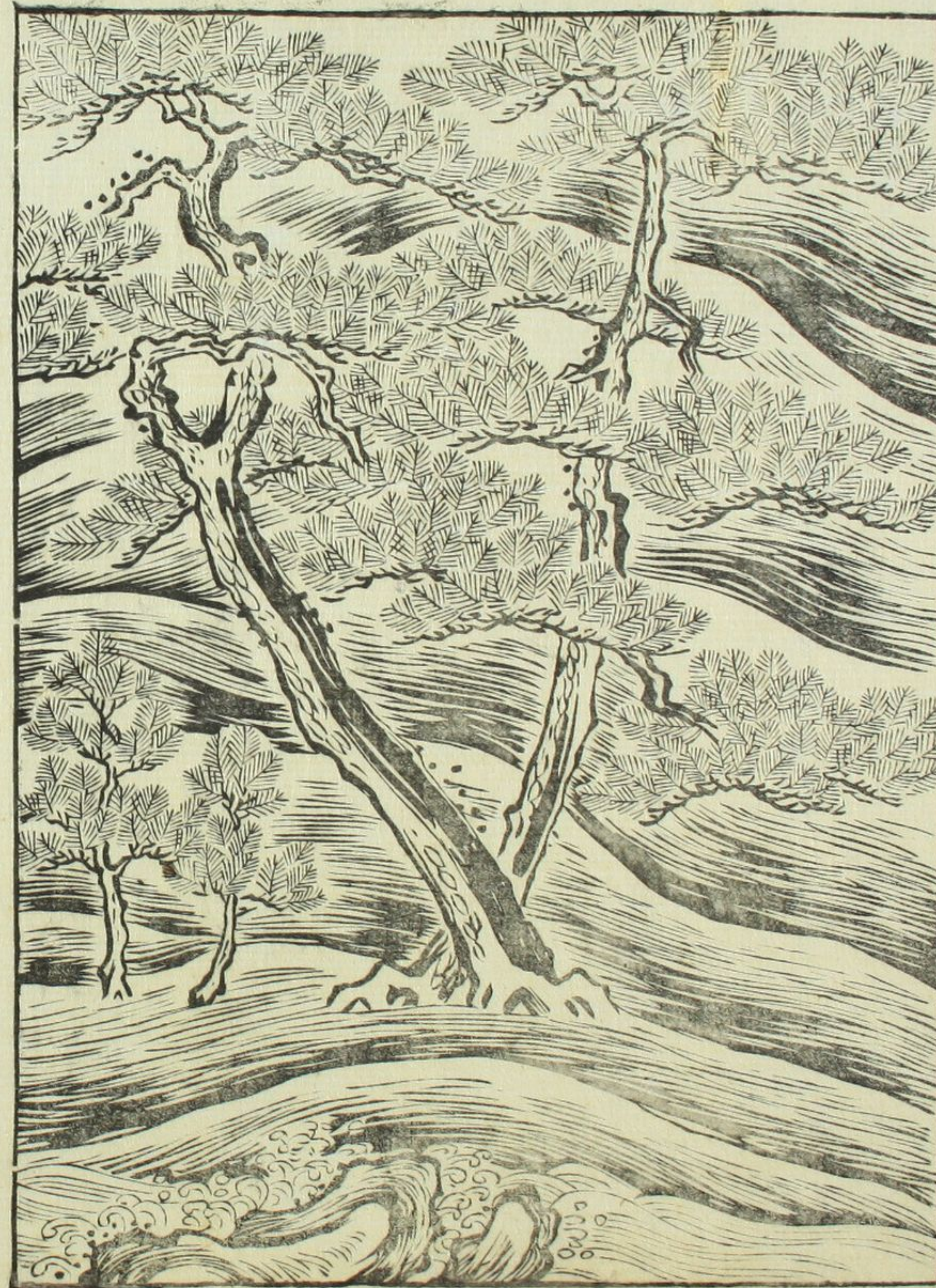
上人の師範。功德院乃肥後阿闍梨皇圓ハ。叡山  
すまうのかりまうくわん 教生法橋皇覺ハ弟子トテ。顯密の碩才ナリキ。  
けんみつ 志願アリハ、じゆん 思惟トシテ、じゆん 自身ハ機分きぶん 浅  
あさ くるるに、このしほむや、すく生死をおへし。活  
ま きたびく生をおへた。先ハ隔生即忘。  
ま して定て佛法をいす。今たましく  
じん 人身をうくといへとも。眼らくハ二佛ハ中間ちうげん 。

してだまを生死の輪廻でんころ返さるべし長  
命は報は得て慈尊の出世ありんよ命は  
がまを地よりすまたるなり。我の如くは  
大地の身をうへへ但大海の金翅鳥の思あり  
池はすまんと思ひて遠江國笠原庄より池  
の池と云池あり。此所の領家より申  
うけて放文をさる。命終るとき水はひ掌に  
中に入てをさる。其後雨ふり池は

らるに彼池より水まらり。大波立て池  
中は塵ましく。悉くさる。諸人耳目を  
驚馬とより。彼所より領家に告ぐる。申た  
るに。其日時を告ぐる。彼閻梨命終の  
日時よそあり。當時より至るまで。志の  
なる夜に池は振鈴の音さる。ゆたると申はる  
侍る。末代はかた家たり。あらかく侍る人  
上人の孫なる。智恵ありて生死のあは

しんばつしん。道心ありて。慈尊にありん事。法  
福ふといふも。うしれま畜趣れ生感感せり  
しん。あつしん。浄土れ法門をまじくさるゆへ  
なり。源宣とのこ此法をたつひえたるま  
う。信不信をうらこけさるも申れあり。極  
樂よ往生れ後ハ十方の國土心よ任て經行し。  
一切の諸佛思に随て供養と何ぞ必ししを  
ひさし穢土に處するこけ福うんや彼閻

梨んるもに後佛れ出世を期して。いんたつり  
池よすそ強りんしん。いんまらむなりとせ。  
信しんを家





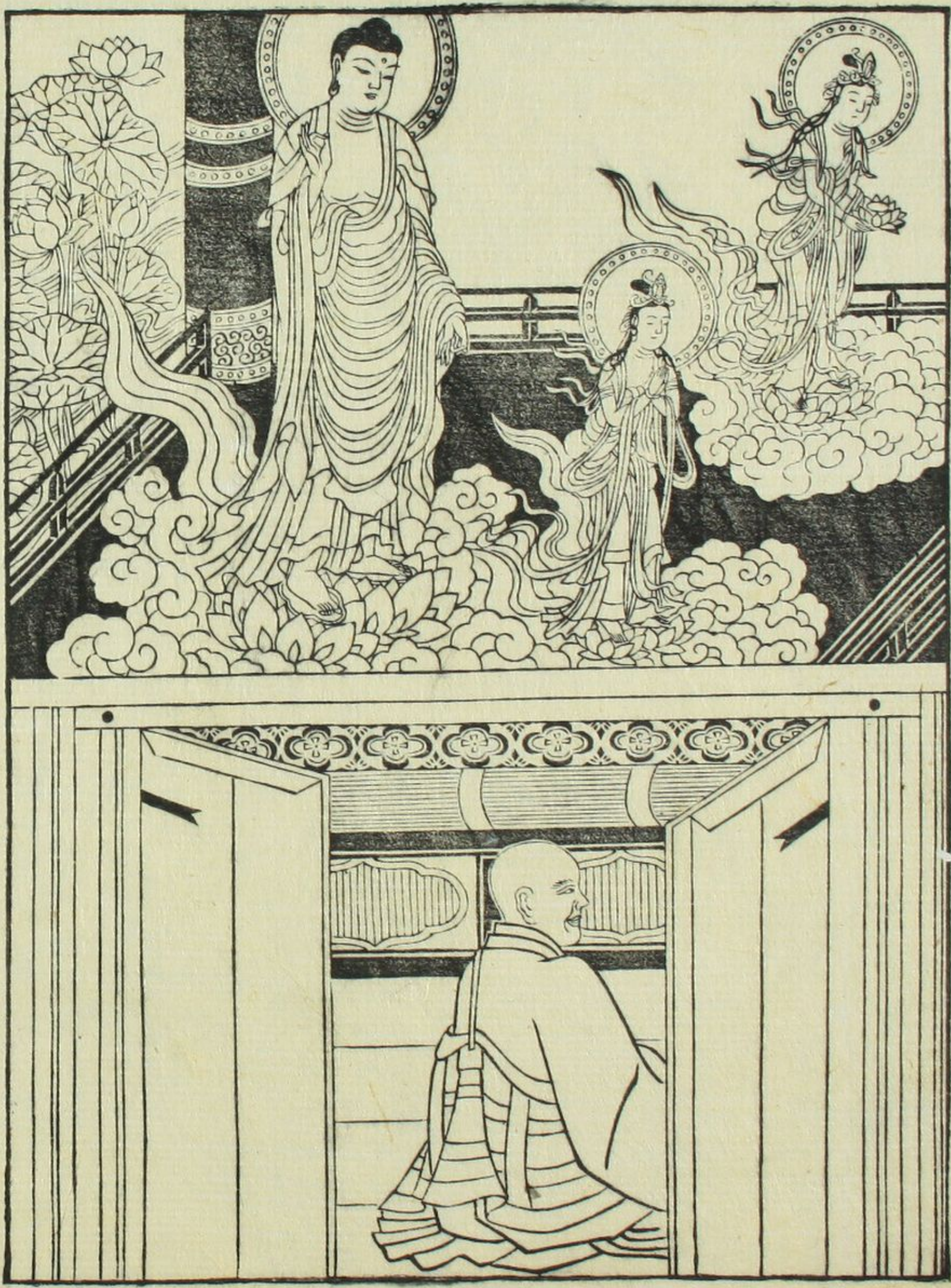
妙覺寺に淨心房とてさうしきありあり。  
道心ゆきまよひに寺門を出ど念佛を行  
すのありき常れ人よこえたり。歸依する人  
雲霞れこら。五十ふりりにて他界へつらに。  
臨終散こたり々里。人これをあやしき。  
妙覺寺の上人これを往生せし。況や餘人  
を也と申あひなき。上人聞給ていささし。  
虚假の行者よとやありつらんと。信しれたり。



其後四十九日佛事に上人を請じて  
まつりて唱導とす。日來此所化どもありて。  
種々の捧物を分け給ふに常随弟子  
衣箱を取出て。此は先師年来所持物あり。  
しつらして御布施奉給。件乃箱は  
布の衣袴乃尋常なり。布は七條の袈裟衣。  
たつひは十二門の戒儀をうけたる上人より  
なり。上人給ふ給ふは日來源宣り申はる

しつらしたるはちたつもの。これひたつてしつら  
虚假の人なり。此所持物をさるに徳たを  
人またうらむ。戒師よ上人となふ心よく  
をこれひたつ。里との給ふ給ふ人これ不  
審哉いふまじなり

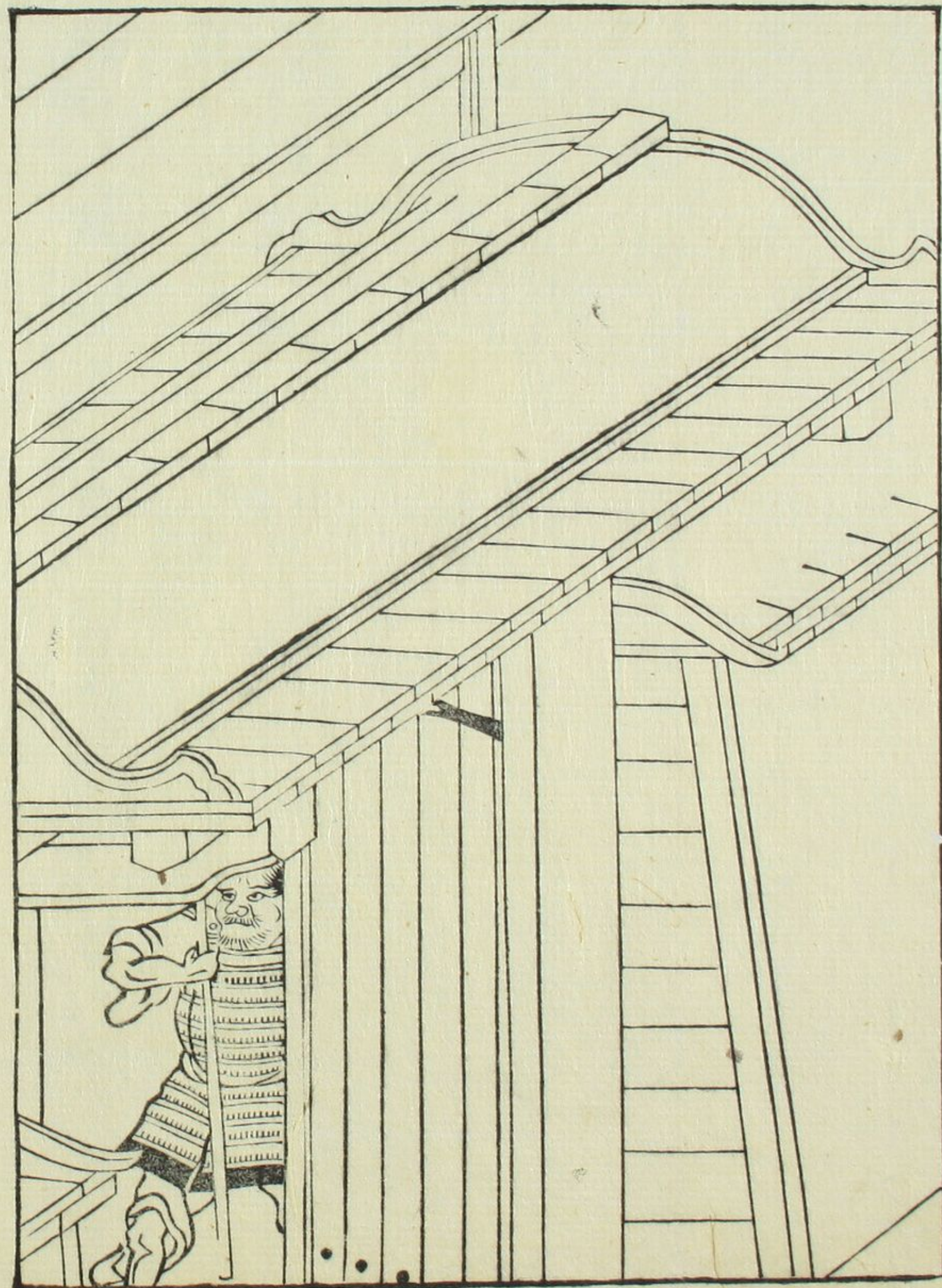
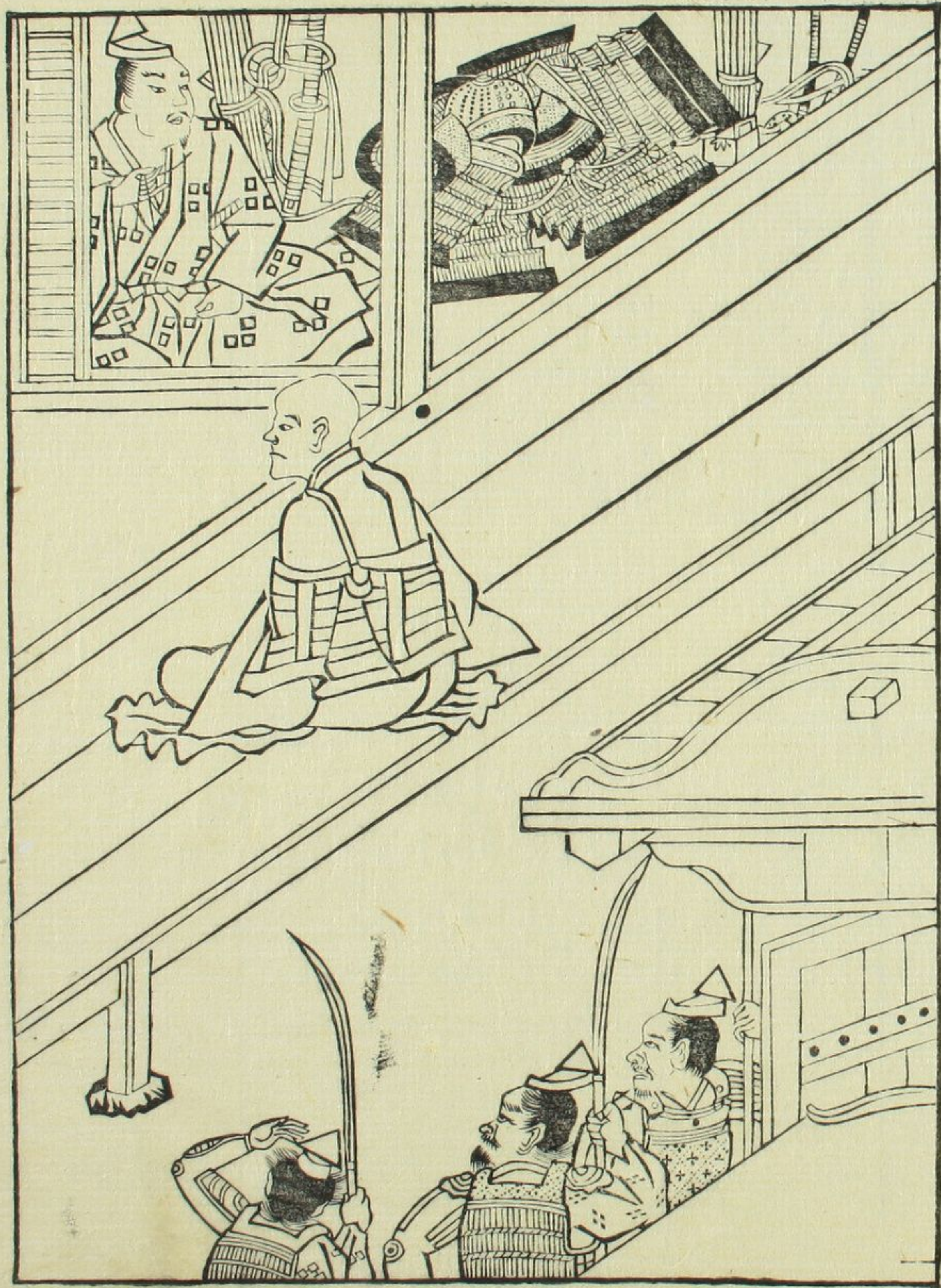


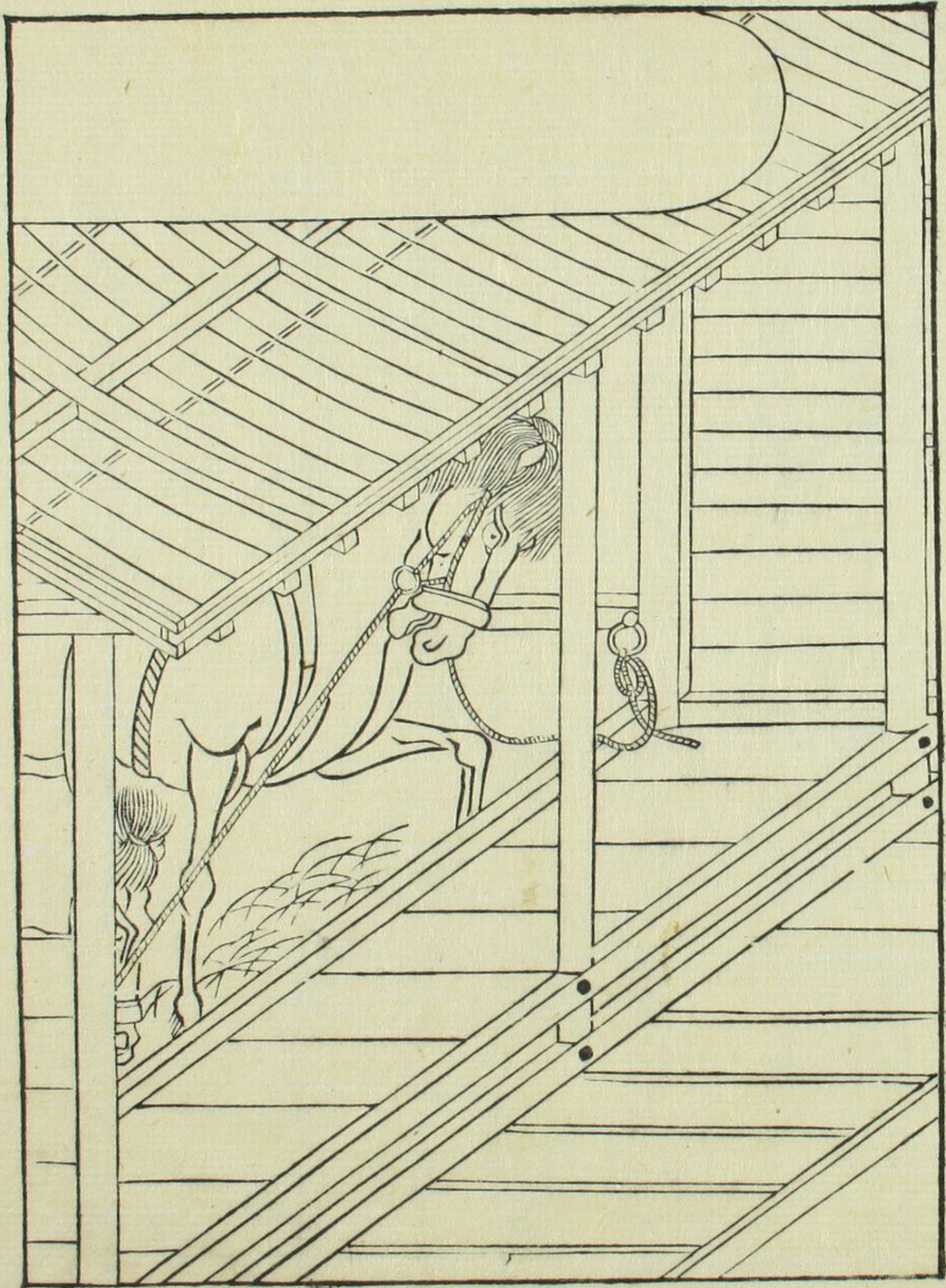


治承四年十二月廿八日。本三位中将重衡卿  
 又平相國此命よりりて南都をせ火るとき。  
 東大寺に火くるときは。大伽藍忽りり灰  
 燼と成よき。其後元暦元年二月七日。谷地  
 合戦。彼中将いけさられて。都へのほりく。  
 大路をさしはきこまよく。れいあわき。後生  
 菩提の事。派申あはせん。おとめに。その請あり  
 るれい。と人おろして。對面し。強て。戒たし。は

ばを申しされし念佛れしとくしく教導あり  
ちりこれたひ生たふれしとくしりなるいほ  
一度上人の見糸よ入極まゆへましく侍りなる  
こてつきりたく収申らまふち受戒れ布施と  
てほしくて。双紙箱を取出て上人の前り  
しをきて申されなる。御要たふも物  
よの侍しひこそ。御目らつき所よなせ強て。  
うい重衡の餘波こそ御覧し。且思食出

俄にたびよいどりちも御廻向あるまじり候  
申らる上人の志を感し。さげさうく  
出強よちち





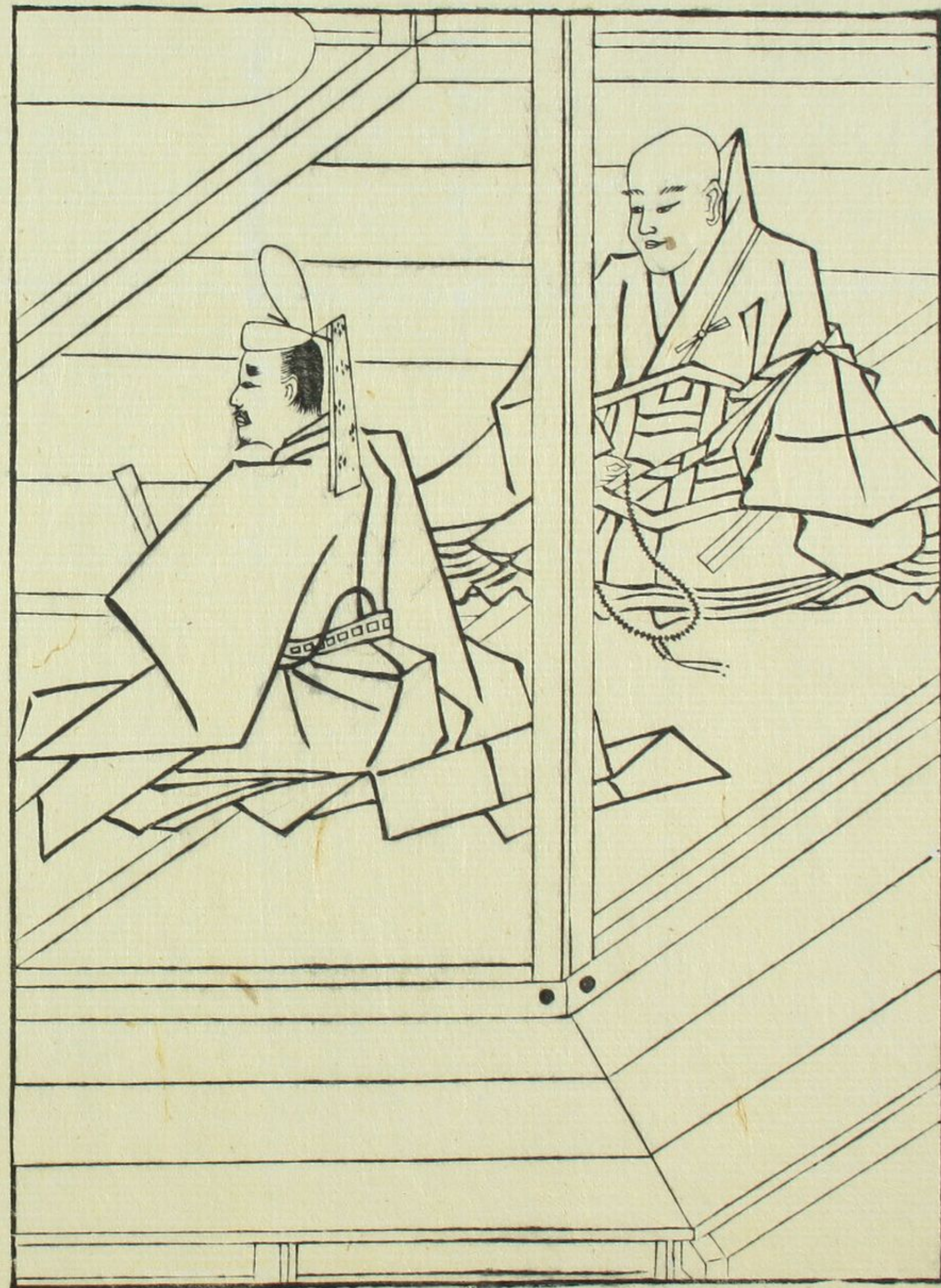
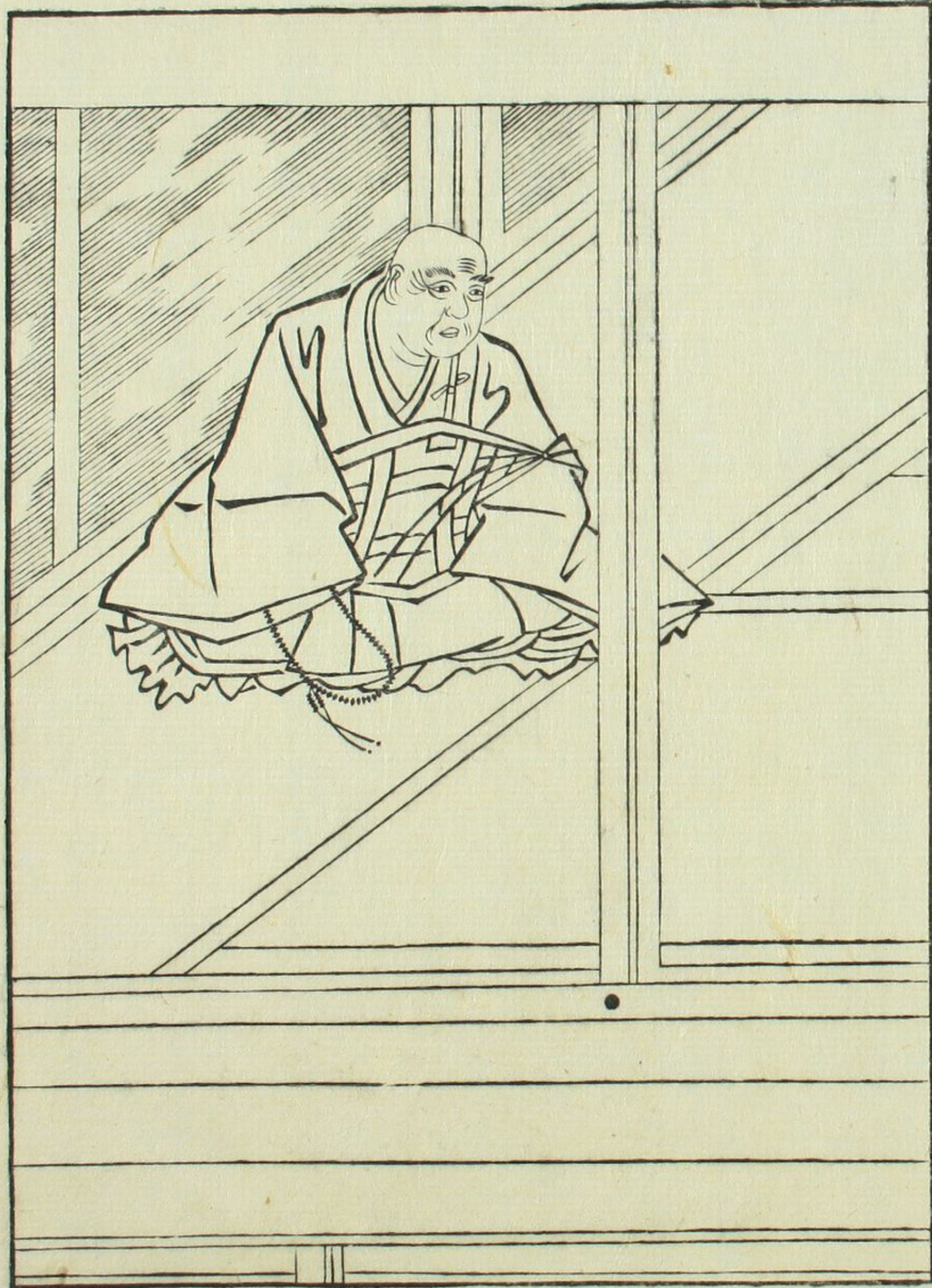
東大寺造管<sup>さうまい</sup>れために大勸進<sup>くわんしん</sup>の聖<sup>ひがし</sup>乃沙汰<sup>さた</sup>  
侍<sup>さむらい</sup>たるに上人<sup>じゆんじん</sup>其撰<sup>せん</sup>よあり強<sup>つよ</sup>よ々<sup>々</sup>れも右<sup>みぎ</sup>  
大辨行<sup>たいべんぎやう</sup>隆朝<sup>りゆうてう</sup>長<sup>なが</sup>を御使<sup>ごんし</sup>よて大勸進<sup>くわんしん</sup>職<sup>しやく</sup>たる  
へきよ。法皇<sup>ほうわう</sup> 後白河<sup>ごしろがわ</sup>乃御氣色<sup>ごきしき</sup>あり今<sup>いま</sup>家<sup>け</sup>よ  
上人<sup>じゆんじん</sup>申<sup>まを</sup>されたるい。山門<sup>さんもん</sup>の交衆<sup>かうしゆ</sup>派<sup>はい</sup>のれて林泉<sup>りんせん</sup>れ  
幽栖<sup>ゆうせい</sup>を志<sup>し</sup>め侍<sup>さむらい</sup>こし。志<sup>し</sup>げくよ佛道<sup>ぶつだう</sup>を修<sup>しゆ</sup>し編<sup>ひん</sup>よ  
念佛<sup>ねんぶつ</sup>行<sup>ぎやう</sup>でん<sup>でん</sup>ためれり。も一<sup>ひと</sup>勸進<sup>くわんしん</sup>れ職<sup>しやく</sup>よ居<sup>ゐ</sup>  
では劇務<sup>げきむ</sup>萬端<sup>まんたん</sup>よりして素意<sup>そうい</sup>をえり。れそじを

魚<sup>うま</sup>きよし波<sup>なみ</sup>がく辞<sup>ことば</sup>申<sup>まを</sup>されたる。行隆朝<sup>ぎやうりゆうてう</sup>は其<sup>その</sup>  
志<sup>こころ</sup>の堅固<sup>けんこ</sup>あり波<sup>なみ</sup>見て。よとの由<sup>よし</sup>波<sup>なみ</sup>奏<sup>そう</sup>し。れん  
も一<sup>ひと</sup>門徒<sup>もんた</sup>の中に器量<sup>きりやう</sup>れ仁<sup>にん</sup>ありん。奉<sup>ほう</sup>申<sup>まを</sup>魚<sup>うま</sup>き  
よ。重<sup>おも</sup>て侍<sup>さむらい</sup>下<sup>くだ</sup>されたるに。よりて醍醐<sup>たいご</sup>の後<sup>のち</sup>系房<sup>けいぼう</sup>  
重源<sup>じゆうげん</sup>を奉<sup>ほう</sup>申<sup>まを</sup>さる。逆<sup>さか</sup>り大勸進<sup>くわんしん</sup>乃職<sup>しやく</sup>より補<sup>おほ</sup>  
せられ。たり。後系房<sup>ごけいぼう</sup>侍勢<sup>さむらいせうせい</sup>大<sup>だい</sup>神宮<sup>じんぐう</sup>に奉<sup>ほう</sup>て。此<sup>この</sup>願<sup>ねがひ</sup>  
も一<sup>ひと</sup>成就<sup>じゆうじゆ</sup>とべくい。その瑞相<sup>すいさう</sup>を示<sup>しめ</sup>し。強<sup>つよ</sup>と祈<sup>いの</sup>請<sup>ねがひ</sup>  
し。多<sup>おほ</sup>た。三七日<sup>さんじつ</sup>れ曉<sup>あけ</sup>うらむ。るめり。夢<sup>ゆめ</sup>たり。



唐將衣束一たる貴女方寸此玉液授給ぬと思て。  
らめく見れん彼玉うけいよ袖此とよあら重源  
らまは得て大よ收ひ珍秘と其後天下響音乃  
こくこに應どして財寶心よ満らせられん程あく  
金銅の本尊をそのごとくまきあつてなり  
々ら重衡卿此上人よ進する所の鏡を結縁此め  
こそ送りゆくられん佛を鑄りてつる爐此  
かまに今に飛出てはるよまきあつてなり

不思議此事とて申あひをる大佛殿此正面の  
柱よ折川をて傳りハ彼鏡よておん傳りなる



壽永元曆しゆえい元曆げんりつ元曆げんりつ元曆げんりつ。源平げんへいの乱らんよりりて命めい被ま都と鄙ひよういういななふふささのの其その數かずをを志しすすにに後ご業ごう坊ぼう。無む縁えんにに慈じ悲ひををたたままささくくにに後ご世せいにに後ご業ごう坊ぼう救きうふふにに興こう福ふく寺じ東とう大だい寺じよりり始はじめて道どう俗じやく貴き賤せんをを志しすすにに七日にちにに大だい念ねん佛ぶつをを修しゆすすにに。その比ひももくくハハ人ひといいままささ念ねん佛ぶつののいいままささ事ことをを志しすすにに。志しすすにに後ご業ごう坊ぼうにに事こと被ま歎たんてて人ひとのの信しんをを勸くわんめめんん

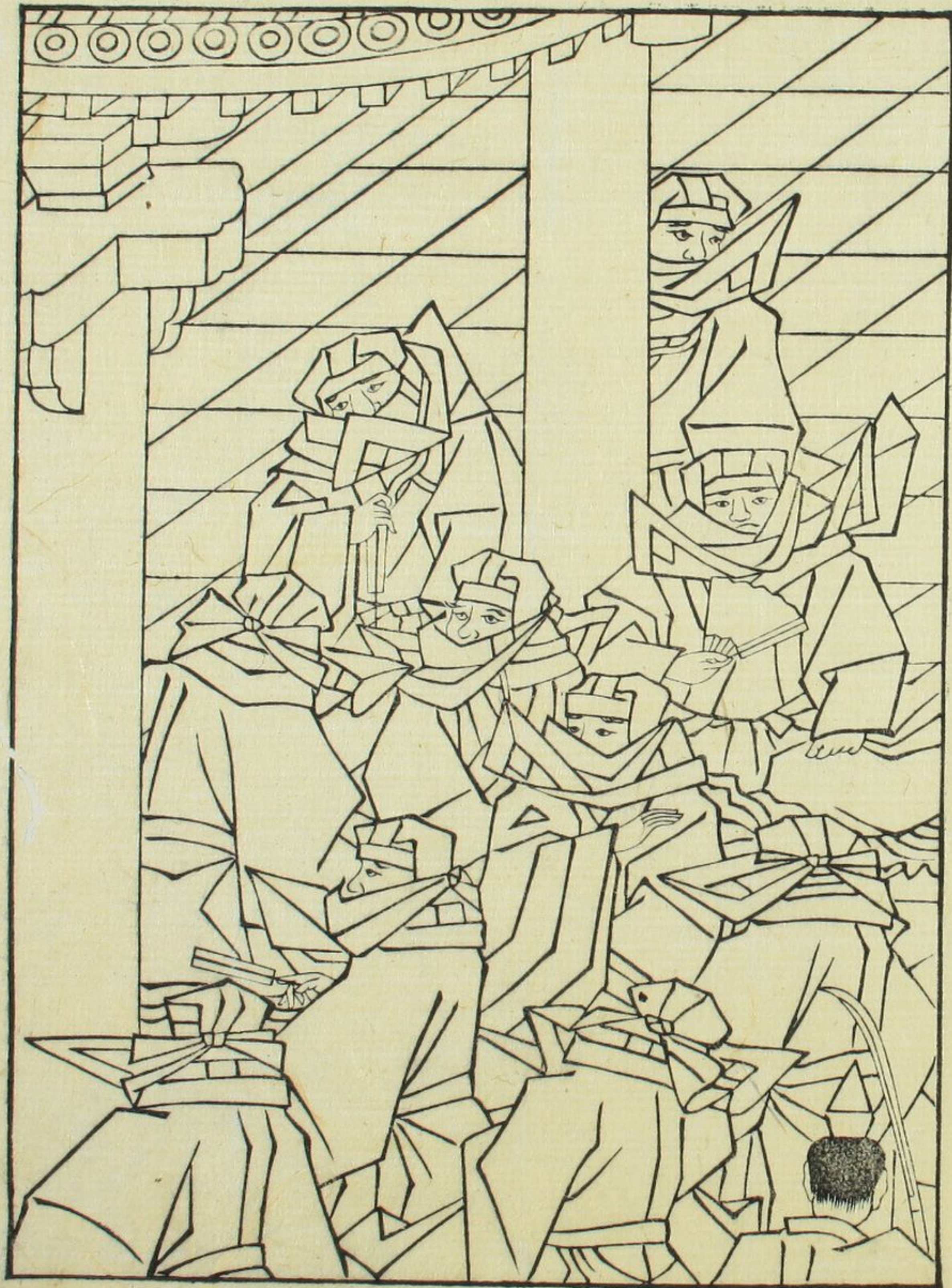
ために建けん久きう二年ににに比ひとと人ひとをを請うかぐぐにに志しすすにに。大だい佛ぶつ殿でんののいいままささ半はん作さくなりなりたるたる軒のきにに下くだりりてて入いるるにに。唐たう乃な時じ渡わりり奉ほう祀しるる觀くわん經ぎやうのの曼まん陀た羅らにに志しすすにに。淨じやう土と五ご祖そにに影えいをを供く養やうすすにに。又また淨じやう土とにに三さん部ぶ經ぎやう被ま講かうをを志しすすにに。南なん都と三さん論ろん法はふ相かうにに碩た學がくにに志しすすにに。大だい衆しゆ二に百ひやく餘よ人にんをを志しすすにに。高かう座ざののままハハ小せうくくにに腹はら卷まき被ま着ちやくしてして高かう座ざののままハハ小せうくくにに自じ宗しゆにに義ぎをを問とううけけくく。訛ひ謬めうああハハ

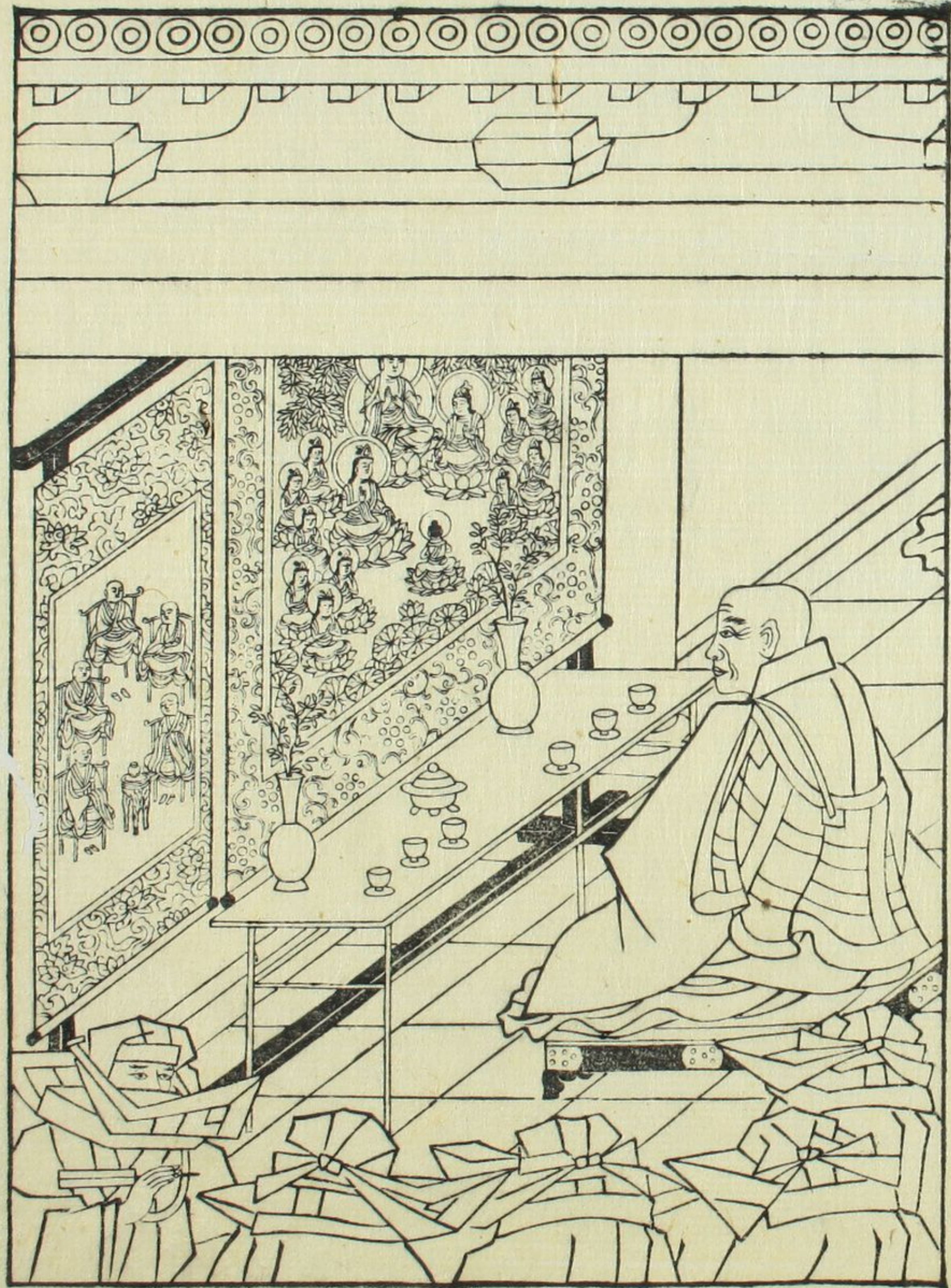
耻辱<sup>ちぢう</sup>はあつて人<sup>ひと</sup>こ。支度<sup>しだう</sup>一たりたる。上人<sup>じやうじん</sup>  
まの三論<sup>さんろん</sup>法相<sup>ほふさう</sup>れ深義<sup>じんぎ</sup>をのへ次<sup>つぎ</sup>よ浄土<sup>じやうど</sup>一宗<sup>しゆう</sup>の秘<sup>ひ</sup>  
蹟<sup>せき</sup>をこまやうに釋<sup>しやく</sup>一終<sup>しゆう</sup>く。未代<sup>みだい</sup>の凡<sup>ばん</sup>夫<sup>ふ</sup>出離<sup>しゆり</sup>の  
要法<sup>えうぽう</sup>ハ口稱<sup>くしゆ</sup>念佛<sup>ねんぶつ</sup>よまてハなり。まう念佛<sup>ねんぶつ</sup>を  
まうらんこそかぬハ無間<sup>むけん</sup>地獄<sup>ぢごく</sup>よ墮<sup>おち</sup>てハ萬  
大劫<sup>たいけつ</sup>苦<sup>く</sup>受<sup>う</sup>へまう。觀佛<sup>くふつ</sup>經<sup>きやう</sup>の說<sup>せう</sup>よまて  
說<sup>せう</sup>終<sup>しゆう</sup>れん。二百餘<sup>にひやくじゆ</sup>人<sup>にん</sup>の大衆<sup>たいしゆう</sup>よりまう一<sup>いつ</sup>人<sup>にん</sup>を  
隨喜<sup>ずいき</sup>渴仰<sup>かつがう</sup>まう。東大寺<sup>とうだいじ</sup>乃<sup>なり</sup>一和尙<sup>いつわうじやう</sup>

觀明<sup>くわんめい</sup>房<sup>ぼう</sup>れ已<sup>い</sup>講理<sup>かうり</sup>真<sup>しん</sup>。まうに涙<sup>なみだ</sup>よじせてハ  
向<sup>むか</sup>のよひまてたえてる事<sup>こと</sup>ハ偏<sup>へん</sup>よ此事<sup>このこと</sup>は  
まうんためれらと悦<sup>えつ</sup>申<sup>まう</sup>な。あてそのはらわ  
てよ天台<sup>てんたい</sup>圓頓<sup>えんどん</sup>の十戒<sup>じゆくわい</sup>を解説<sup>かいせつ</sup>一終<sup>しゆう</sup>よ吾山<sup>ごさん</sup>ハ  
大乘<sup>だいじやう</sup>戒<sup>かい</sup>これ寺<sup>じ</sup>ハ小乘<sup>せうじやう</sup>戒<sup>かい</sup>このへ終<sup>しゆう</sup>れん大衆<sup>たいしゆう</sup>存<sup>ぞん</sup>  
外の氣色<sup>けいしき</sup>こそれも終<sup>しゆう</sup>れん。當寺<sup>たうじ</sup>れ古老<sup>こらう</sup>乃<sup>なり</sup>  
中に兼<sup>けん</sup>日<sup>にち</sup>よ靈夢<sup>れいむ</sup>を志<sup>し</sup>えんす。あはらなは  
またらて披露<sup>ひる</sup>一終<sup>しゆう</sup>にらて。斟酌<sup>しんしやく</sup>一終<sup>しゆう</sup>

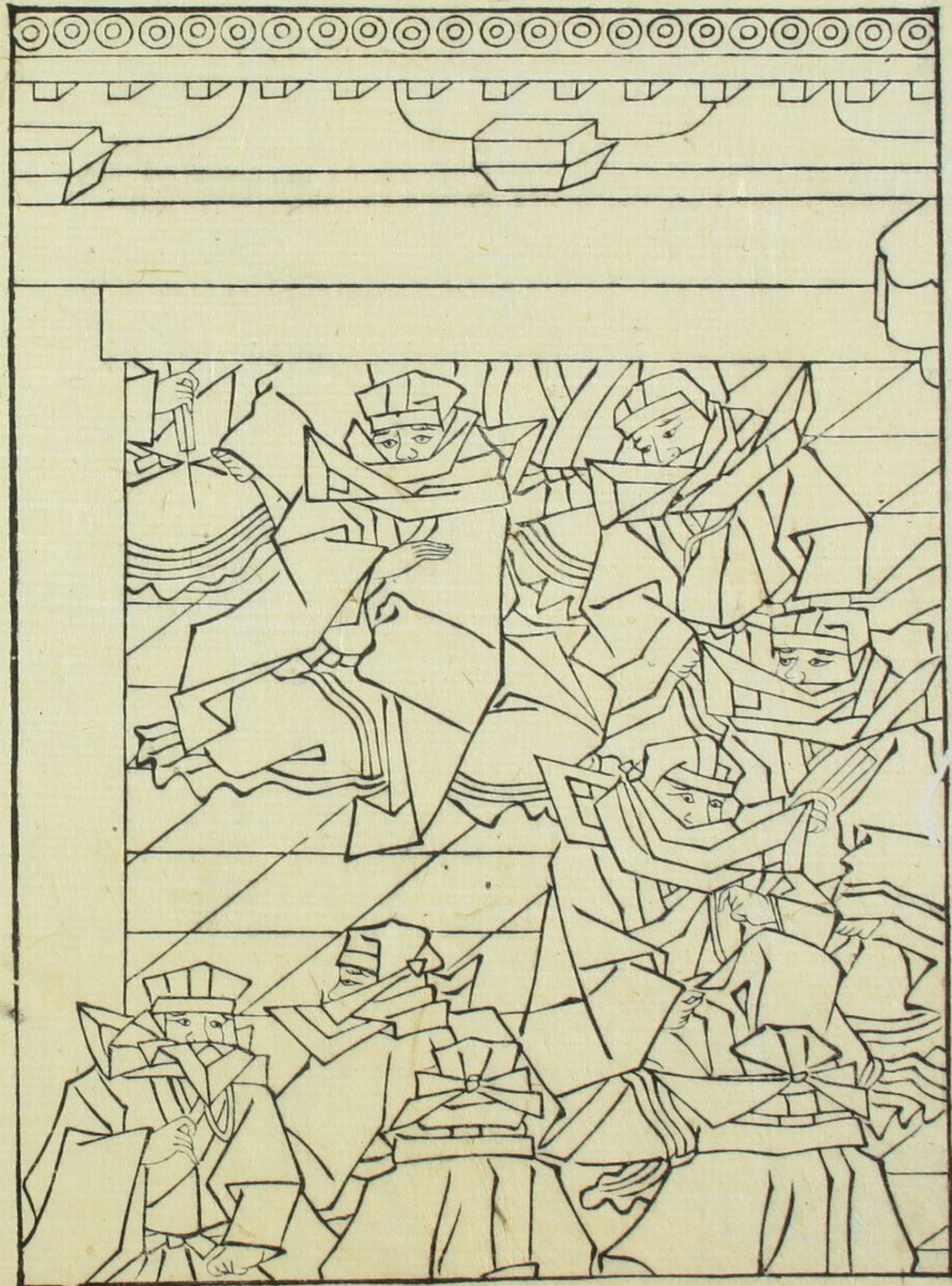


よや。衆徒しゅとをのく口くち張は用もちて。別事べつじたより分わり

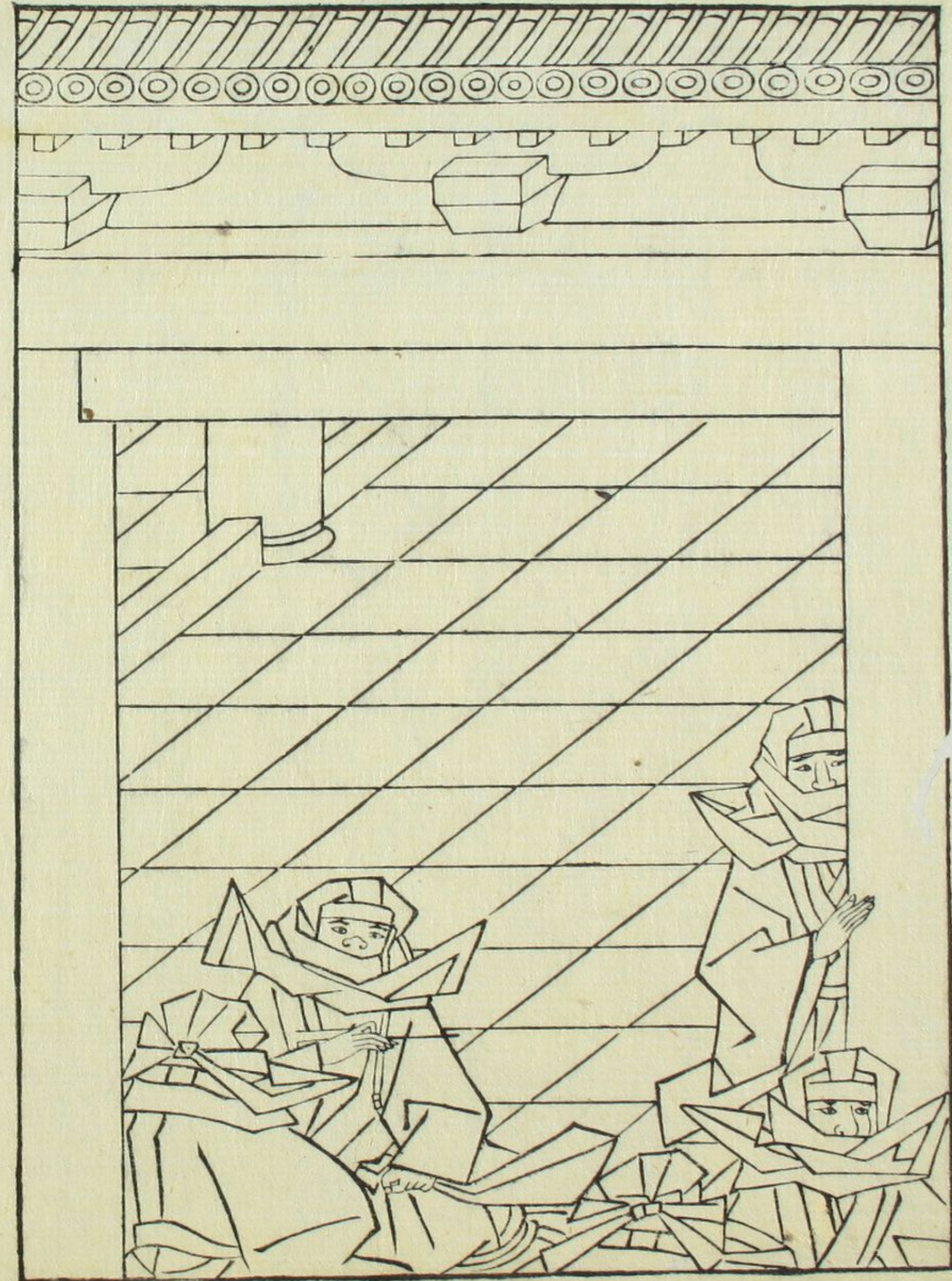
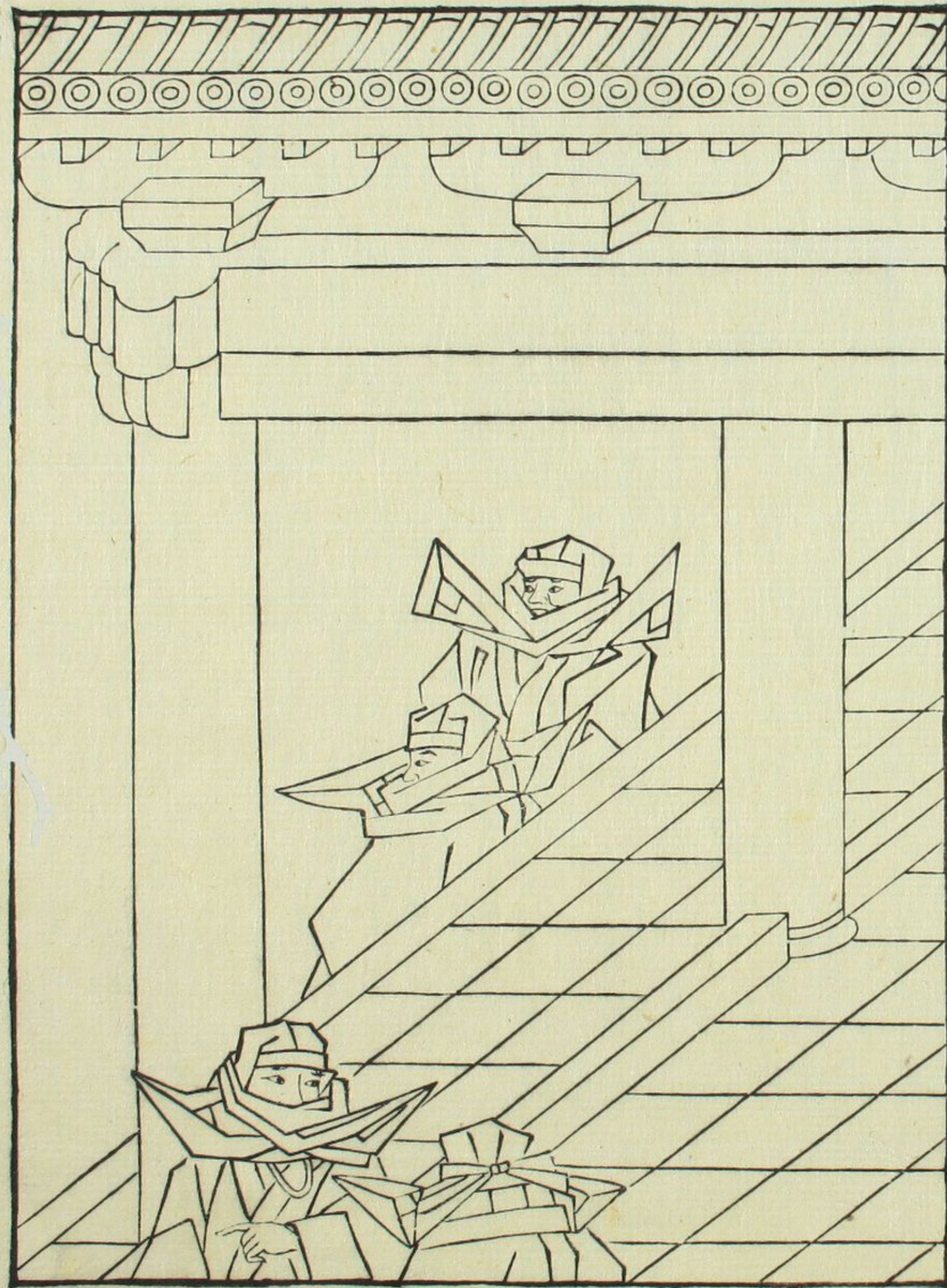




竹  
九



竹  
九







上人屋よやうし儀事とて給はばわくれども  
 我國此風俗よ隨く法門よよせていささく  
 わりいをのへられどもよや。或ハ門弟此中より  
 志をもける哉申はれん或てげか書付  
 給へるを没後よ披露し給ふ

春

けしき地ぬえをある儀をうたへん  
 通してのふたし何さうけえられ

夏

わさひのさきほしけりいづらあふくさ  
こころはほかにいけぬ目それさ

殊

阿弥陀佛よろむらんれきよいごと  
秋の猶れきくひなうま

冬

雪れうらに佛の心名を唱まこ

はまれりけとそやうきまえぬ

逢<sup>あひて</sup>佛法捨身命と云へる事哉

うらそあのをきれゆら乃悪りたよ

あふよい身をまをけりいさ家

勝尾寺<sup>かつおでら</sup>よて

柴の戸よりあけとまきく家白雲哉

いけしとさきれとりこれとけ

極樂往生<sup>ごくらくせいじやう</sup>れ行業<sup>ぎやうごふ</sup>よハ餘<sup>よ</sup>の行をうをたて

此歌入玉  
葉集

たゞ本願此念佛を信じて入ると云ふは  
あまの佛といふより外にはの國に  
たゞこののこころをあつちかく  
極樂へはらえてもやくいてを  
身のをいぢりよいさむかりまはる  
阿彌陀仏といふよふにせよ乃  
まわけてもしたる御そすしき

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨此心を

月影のうつぬ里のたけまを  
たゞこののこころにうとむ

此歌入續千  
載集

三心此中の至誠心乃ん哉

往生いよにやともれとれ人そ

まことのこころれそそそ

睡眠すいみん此時十念を唱へとなと云事哉

阿彌陀佛と十聲唱へくはらるらん

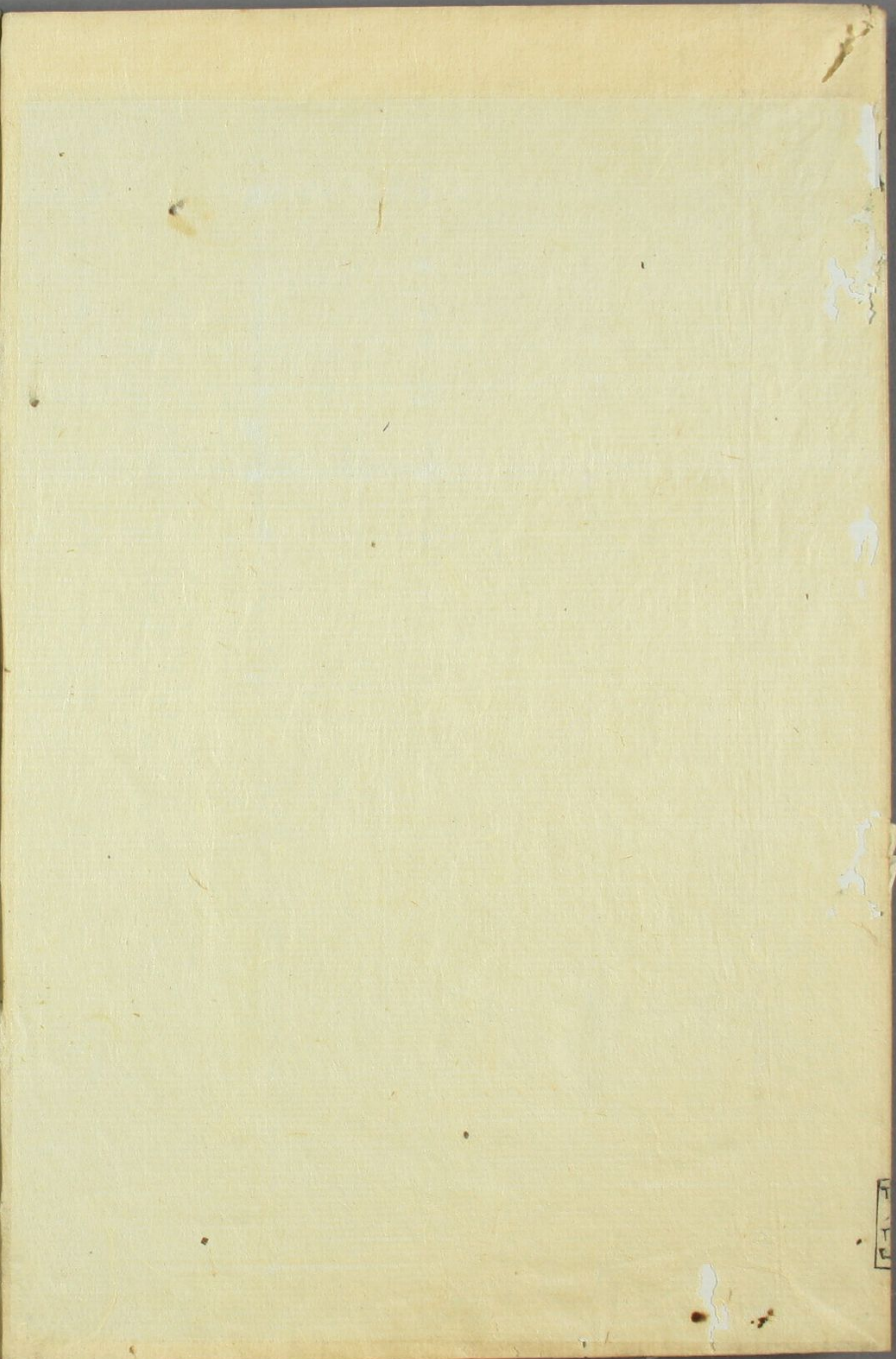
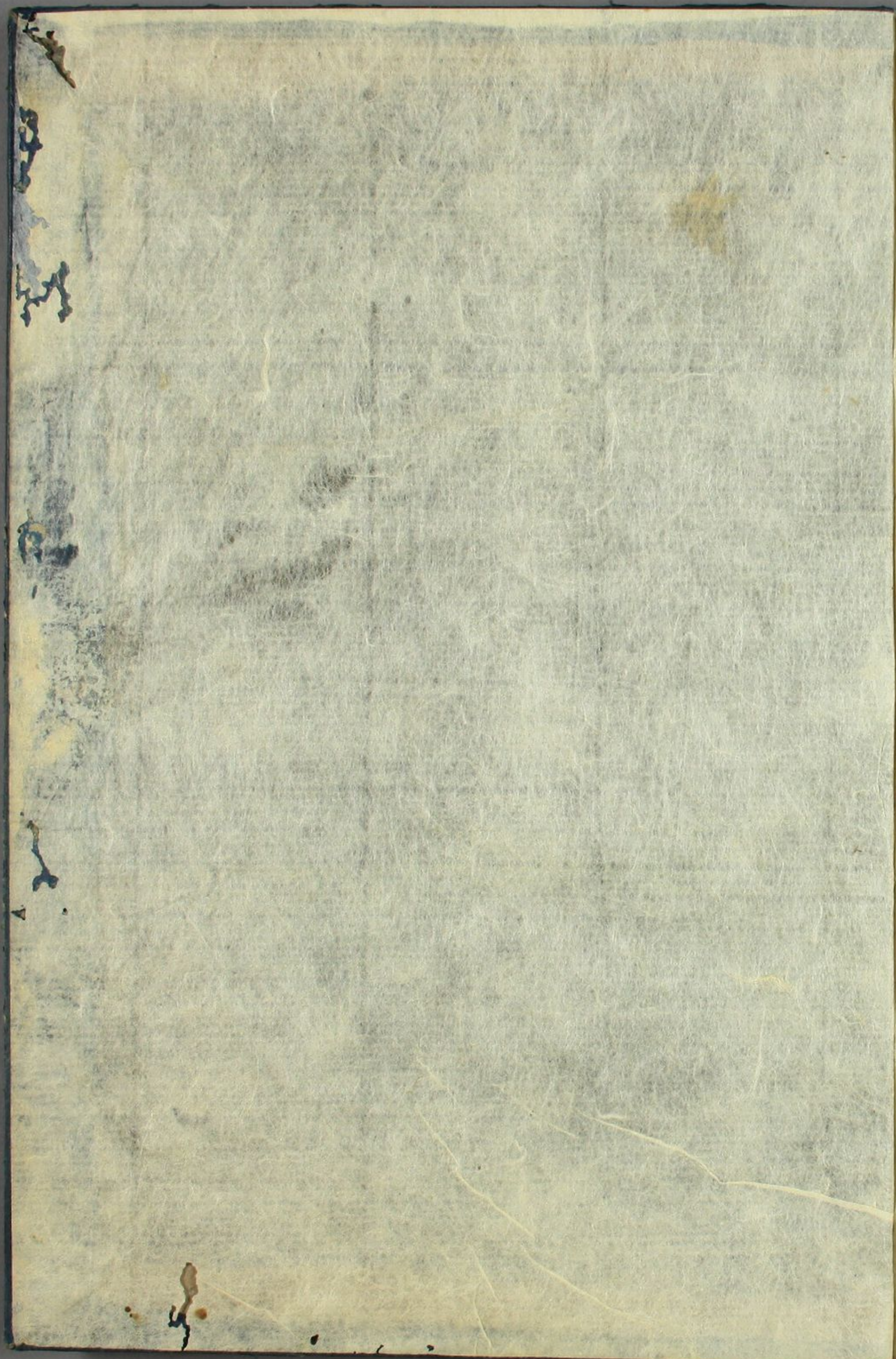
たゞまの御よよにらもいそよ

上人ていつく書付給へりきを  
子とせぬも小松れもとて候とてころよと  
無量壽仏のじゆくをそまの  
にぼつたれたまといひもんこすらとて  
そらむけぬらたらまのり枝  
池のあんれんよぬこりもり  
よらりすじとけらぬたをれい  
じまれていまの思ひいそんあひまに

弊うゝなれらうきよとて候

阿弥陀佛と申ころをばはらめよとて  
浄土の莊嚴かうざんもるそとけりま

元久二年十二月八日 源空



12

